に悔悟の自殺を遂げて居ります。「罪の價は死なり」とは、他律的刑罰に於て眞なるのみでなく、自律的悔悟に於ても眞であります。然し神の子類の本願は、死で了いたいのではない、自殺を遂げて亡くなつて了いたいのではない。一たび死んで其罪の價を拂つて、再び潔白な身に生れ替りたいと云ふのであります。死んで亡くなつて了うと云ふのは、飽まで其の罪を持つて遁げようとするので、的然滅亡の子類の心であります。其の適例はイスカリオテのユダであります。是故に神は後者を其の滅ぶるに一任して、前者には更生の方便を與ふるのであります。

問　更生の方便とは、

答　ペテロの謂はふる「罪の赦を得んが爲にイエス、キリストの名に託りて沒式を受くる」ことであります。沒式を受くるとは、水の中に浸沒することで、罪を悔ゆる靈魂が、死して而して葬られて、而して復活る作方であります。然し一瞬間水の中に沒まつて、其で其人の犯した罪が、如何なる大罪でも、神の前に赦さるゝと云ふのは何樣云ふ譯であるかと申すと。是は水を浴びる樣に、唯水に沒むのでは無い。耶蘇基督の名に託りて沒めらるるので、其の耶蘇基督の名に託ると云ふ事が肝心なのであります。其の耶蘇基督の名に託ると云ふ事は何樣云ふ事であるかと云ふと、是は耶蘇基督の名を己に受け取つて、自ら其の人の屬に爲ることを意味する、別言すれば、即ち基督を信ずると云ふことであります。基督を何と信ずるかと云ふと、基督の十字架の死を自分の代理的贖罪と信ずるのであります。基督は十字架の上に死にて、三日墓の中に在りて、第三日に復活しました。是が沒式の典型なので、沒式は取も直さず此の典型を寫した模型であります。而して此の模型を寫し行ふことに由りて、我等信者は神に由りて基督の典型に合した者、解釋すれば沒式を受くることに由りて基督と與に十字架の

上に死して、其の墓に葬むられ、而して又基督と與に更生したる者と視做され、然か見做さることに由りて、罪より釋さるゝ者であります。沒式の價値は然して赦罪の功果を生ずるのであります。此の義は猶詳細に說明する機會がありませう。此處では唯沒式が基督の代理的贖罪を信ずる自證行爲であることを承知して戴きたい。

問　罪障消滅の爲に、代理的贖罪は必ずしも必要でせう乎。

答　贖罪の必要なることは、如何なる民族も獻牲儀式を有つて居るので明白と思ひます。日本の古代宗教――神道でも、其の人の罪を其の人の衣服、白紙を以て剪裁したる衣服の模型――に負はせて、之を禊つて居るのであります。此の代贖の思想は、太古の祭司國であつた猶太民族の中に最も完全な形式を取つて顯はれて居ました。神は其の國民に罪祭の儀則として、大凡罪を犯したる者は、罪なき當歲の羔を取り、之を其の犧牲即ち代贖とし、

て之を屠り、之を神に獻ぐる事を命じました。神は之に由つて其人の罪を赦したのであります。然し後世人間の常識が次第に進歩して來て、羔の代贖の無能力を感ずるに及びまして、神は其の羔が模表して居た眞の犧牲、即ち其の獨子基督を人類に與へ、其の十字架上の死を以て吾人の完き代贖と立てたのであります。

問　然らば神は血を好む嫌はありませんか乎。

答　否、聖書には一片の懺悔を以て其の罪を赦された例が幾何もあります。人の血を流した者でも、唯懺悔で赦されて居ります。犧牲の代贖と云ふものは神が血を流すことを好むが故でなく、神が人心最後の要求を、即ち死と更生の要求を熟知し、之に應じて其の救拯の方便として立てた物であります。前にも既に申した如く、罪の償いである、死なければ罪が消へぬ、即ち神に見えることが出來ぬ。此の崇高森嚴な思想が我等人類の良心に儼

在して居りますことは前に武士道の謝罪的割腹の適例を引いて語つた如くであります。然るに末の世になりまして、罪を見るの眼が次第に朦朧を加ふるに隨つて、十字架の贖罪が次第に見えなくなつて神を殘酷である、罪を重く見過ぎる、血を好む神であるなど神を咎めて悔改めぬ人々が次第に益して來ることは、勿論基督の預言する所でありますから、今更驚くこともありませんが。然し慨嘆せざるを得ない事であります。

問　何樣すれば沉痛剴切に罪を悔いることが成ます乎。

答　神の働に由るのであります、一たび神の能力に感じますと、之を犯して過ぎ去つた罪は、目の前に立ち顯れて、宛も鏡で我が醜き面を見るが如く、的歷と見れて來ます。實際人ほど愚な者はない。顯に罪を行つて置て、天地に目がない、萬物に耳がない、何人も知らないのと思つて、之を隱して澄して居ります。然し自然と人とを欺くことは出來ようが、己を欺くことは出來ない。自分の目が儼と見て居る。其を見て居て見ぬ態を裝て居る。然し隱すことは成ぬ。良心と云ふ内なる光が、内を照して我が罪惡を顯はし、我が心眼をして之に面せざるを得ざらしむるのであります。我は惶懼と慚愧に耐えぬ。之を悔いて再び之を爲さじと決する。然し其の決心の薄弱なることは吉野紙にも猶ほ如かない。一たび行つた其の罪惡が、忽ち我を誘ひに來る。直ぐに應ずる。射し來る良心の光を一氣に吹き熄して又行ふとする。良心の光は幽かであるから、吹き熄せば忽ち熄ゆる。是から以上は自在に己を行ふことが成る。任意に罪を樂むことが出來る。一度は恐殺慚死の念に耐えぬと思つた罪行が、漸漸に習慣となつて、今は之を行はざれば一日でも活きて居る事が出來なくなる。天地に目が無い、萬物に耳がない。何人も知らない。知れても管はない。世間一般皆行つてる。自分一人慎で居る必要はないと、陰然と行ひ、公然と行つて居る。然し神の怒が一

たび顯れ、天火忽ち其心を打つたる其とき、宛も紫電が闇黑に閃き、一目に闇中の森羅萬象を顯はす如く、我が過去の罪惡の醜態、悉く神の目の前に赤裸に暴露し、恐懼と慚愧に魂消え、身の置き所、心の遁げ所がない。唯其罪を口から吐露して、白狀して了は無ければ、居ても立ても居られない。人は猶ほ我が欺を受けて、我を潔白と確信して、反つて餘所の罪惡を我に語り、餘所の罪を我と共に難しようとするのである。既や耐ふる所でない、此上人を欺いて居る事は、既う恐ろしくて到底も成ぬ。何も彼も白狀して、我は實は此樣な罪惡を犯して居る者である、罪人は此の我だと、自ら名乘つて出なければ、一刻も平安が無い。此上猶ほも隱し立を爲ようとすると、森羅萬象儼然我を憤り視る。風聲鶴唳齊く我を呵喝する。我は一點の露にも己の汚を照らされ、一葉の翻るにも驚かざるを得ないのである。人は猶も欺けよう、自然は猶も欺けよう。然し同時に我は我が山の如き罪の重負を背負ひて獨り原野を沉吟して行かねばならぬ。「我認はさゞりし間は終日悲み叫びたるが故に、吾骨陳び衰へぬ。汝（神）の手夜も晝も吾が上に在りて重く、吾身の滋津は變りて夏日の旱の如くなれり」（詩三三〇三、四）と曰へる如くであります。是に於て「我謂へらく吾罪をエホバに認さんと。斯る時しも汝吾が罪の邪回を免したまへり」（詩三三〇五）と謂へる如く、神妙に神と人との前に出まして、其の一切を告白し、人々よ罪人なる我を免したまへと大聲をあげて哭きます。其時始めて罪の重負を前に卸して、平安の家に返るのであります。

問　然らば人は悔改むる爲に何れだけの事を致せば宜しいのです乎。

答　前に申した所を總べますと、悔改の事實として三個の事があります。一は即ち告白すること、二には即ち基督の贖罪を信ずること、三には更生の洗式を受くること是であります。

第三章　贖罪

問　基督の贖罪と云ふに如何ほどの理由のあるものです乎。

答　基督の贖罪を成就する爲二個の要件が要るのであります。

一　人類の罪を償ふものは同じ人類で無くてはならぬ事。

二　同じ人類の中にも、罪なき者で無くてはならぬ事。

之を約すれば、罪なき人でなければ人類の贖罪に立つことが成ないのであります。律法に由れば猶太人は罪なき當歳の羔を屠つて、之を代贖に獻て居たとは、前に申した如であります。此の罪なき當歳の羔は、第二の要件には當つて居ります。然し第一の要件を缺いて居ります。何故に羔では可けぬか、羔には人類に對する同情がない、隨つて又贖罪の意識がない。人類に對する同情もなければ贖罪の意志もない獸を獻げて、其で人類自身の罪を贖はせようとするのは、元來不合理な所爲であります。唯常識の幼冲な時代に於てのみ人は然して滿足し、神も之を以て其の罪を赦したものであります。否實は滿足しない、故に其の羔を毎年獻げて贖罪の祭を爲て居たのであります。此は不完全なる贖罪でも、之を反覆することに由りて不完全を充すことが成ようと云ふ樣な、苟且な考から起つたのであります。此故に新約の記者は左の如く此の闕點を指摘して居ります。

律法は來らんとする美事の影にして、實の形に非ざれば、年ごとに斷ず獻る所の祭物を以て神に來る者を、恒に成全すること能はず。若成全することを得ば、獻祭者一たび潔められて、復罪を覺えざるが故に獻ることを止めざらんや。然ど年ごとに此祭をなすに因て、罪を憶ること現はるゝなり。(希十〇一—三)

而て又茲に來らんとする美事とは、「世の罪を負ふ神の羔」と稱れました基

督の犧牲を指したので、舊約の羔の犧牲は、即ち此の基督の模表であることを闡明したものであります。

問　其の基督の犧牲を伺いたい。

答　基督は本天上の靈であります。神の勅に遵ひて萬物を造化した者であります。彼が肉體となつて此世に生れたのは、人類の拯の爲であります。彼は靈のまゝで人類の罪を拯ふことは能ないなどゝは、我等の敢て言ふ能はざる所であります。然し彼が人となつたのは、人類の爲に考慮して、最も善き方便を取つた者と思はねばなりません。是故にパウロも「彼は神の體にて居しかども、自ら其の神と匹く在ところの事を棄難きことゝ思はず、反て己を虛うし僕の貌を取りて人の如くなれり」と曰ひました。何故人とならねばならぬか、其の理由として錄されたる所は是であります。

惟我等天の使等より少く遜らされし者、即ち死の苦を受しに因て榮と尊貴を冠せられたるイエスを見たり。其の死たるは神の恩に因て衆の人に代りて死を嘗はんが爲なり。夫諸子（人類）は同じく肉と血とを具れば、彼も同じく之を具ふ。是れ死を以て死の權威を有る者、即ち惡魔を滅ぼし、而して死を怖て生涯繫がるゝ者を放たん爲なり。實に彼は天の使等に承けず、アブラハムの子孫に承く。是故に神に屬る事に就て、矜恤あり且忠信なる祭司の長となりて、民の罪を贖はん爲に事毎に其兄弟の如くなるは宜なり。（希二〇九—十七。）

上文の主意を指摘すれば、彼が肉體を取つたのは人類の爲に矜恤あり、且忠信なる祭司の長とならんが爲であります。是故に又他の所に次の如く錄してあります。

蓋我等が荏弱を體念（おもひやる）こと能はざる祭司の長は我儕に有らず、彼は事毎に我等の如く誘はれたれど罪を犯さざりき。是故に我等恤をうけ機（をり）に

合ふ助となる恩惠を受んゝ爲に、憚らずして恩寵の座に來るべし。(希四〇十四—十六)

前節の忠信又は矜恤とは、後節の體念である、體念の原語 ἐυσπλάγχνα 直譯すれば同情であります。彼其神と匹くある所の事を棄て難き事とも思はず、僕の形を取りて此世に來つたのは、此の同情の一念に動かされて然るのであります。基督の犧牲は實に此の同情から發つたのであります。同情の無い救は有るべきでない。同情の無い救は遊戯であります。然もなければ羔の塲合の如く强迫に過ぎない、到底虚僞を免れません。同情が無ければ忠信がない、忠信が無ければ感激感謝の情が起らない。感激感謝の情が起らなければ隨て悔悟改悛の念が起りません。別言すれば同情の無い救には、同化力即ち報恩の念が無い。同化力が無ければ人類を罪より救ひ出すことは出來ない。人類は依然現狀の儘であるのであります。一たび其より拯はれた罪を生涯反覆するのであります。羔や犢が人類の罪を全く贖ふ能力資格の無い理由は、茲の點に在るのであります。之に反して基督教が神たる體の儘を以て人類を救ふとしても、若其の神たるが故に、人類に對する同情が無いとしたらば、縱し又有つても、其の神の體で居たまふことの爲に、其の同情が人類に感ぜられ無いとしたらば、其の結果は亦動物の犧牲に異る所は無いのであります。故に基督に人類の同情を有たせん爲め、若くは基督の同情が人類に貫徹するやう、別言すれば基督の救が人類の爲に完全であり、眞實であるやう、彼自身矜恤あり且忠信なる祭司の長として、人類の罪を贖ひ得るやう、神と匹くある所の事を棄てゝ、弱く賤く繫縛ある僕の體、人の子の身を受けて此の世に生れたのであります。既に弱き人身を纏ひ、弱き人性を受けまして、自から病と罪の纏繞を受けましたので、人の肉體と精神の斯ばかり弱い者かと云ふことを、我等と同樣熟く感知したので

あります。先づ其の肉體に就て言へば、彼も我等と等しく飲食を得ざれば餓え渇くのであります、旅行をすれば疲勞を感ずるのであります。悲哀を感じては哭かざるを得ない、苦痛を受けては呻かざるを得ないのであります。是故に彼が自身傳道の三年間、盲者の眼を開き、聾の耳を啓き、瘖者の舌に言はせ、跛者の足を立たせ、死たる者を復活して、哭き悲しむ父母兄弟に返しました。預言者イサヤが申した如く「自ら我儕の恙を受け、我等の病を負ふたのであります。精神の上に就て云はゞ、一層疾痛惻怛であります。彼は其の傳道の生涯を我儕の生涯と等しく、自ら誘惑の生涯と稱して居ります。(路廿二〇廿八)彼の傳道は實際誘惑に發つて誘惑に終つて居ります。故に聖書は錄して居ります。

彼は事毎に我等の如く誘はれたれど罪を犯さゞりき。(希四〇十五)

彼の我等と異る所は罪を犯さなかつた耳であります。其の事毎に誘はれたのは我等と異る所はない。故に彼は有らゆる精神上の苦患を嘗つて居る者であります。何となれば誘惑に遭つて之に打ち克つまでには、如何許煩悶せねばならぬか分らないのであります。我等は煩悶に煩悶を重ねた結局、終に誘惑に打ち敗けて罪の奴となるのであります。彼は誘惑に打ち克ちました。然し我等と同じく煩悶苦闘の經驗を嘗めて居りまして、熟く我等の内面の哀むべき情實を知つて居ります。故に聖書は又記して、

彼は悲哀の人にして艱患を知れり。(賽五三〇三)

又、

蓋彼自ら誘はれて艱難を受けたれば、誘はるゝ者をも助け得るなり。(希二〇十八)

とあります。殊に最後のゲスセマチの園の誘惑の如きは、彼自から「今我心憂ひて死るばかりなり」と言つたほどでありました。今夜は彼自身敵に

賣さるゝ夜、明日は十字架の死に就く日でありまして、誘惑の意味は彼の十字架の決心を奪はうとするのであります。何となれば十字架の上には身の毛も立つほどの恐ろしい苦痛があります。而して其の後には又靈魂ある者に更に恐ろしい陰府の死があります。誰か好んで之に就く者がありませうか。彼は神である、神に於て何か有んと申しませうか。彼は神である如く又人であります。我等の忍ぶべからざる苦痛は、彼にも亦忍ぶべからざる苦痛であります。此の忍ぶべからざる十字架の死を遂げて能く我等人類の爲に贖罪の犧牲となると云ふのが、即ち彼の理性の決心であります。然し彼の感情は甘じて其の十字架を受くることが能ませうか。是が實に疑問であります。惡魔は即ち此の感情を誘ふのであります。惡魔は恐く斯樣に申しましたらう、世の罪を救ふとならば、必ずしも十字架を負ふに限らない、猶太王となるのも世の救拯である。十字架の救は靈魂を先にして肉體を後にする。猶太王の救濟は肉體を先にして靈魂に及ぶ唯其の順序を異にするのみで、歸する所は同趣である。今にても汝が若し猶太王たる志あらば、汝の弟子は之が爲に戰はんとて、二の劒を所持して居る。イスラエルの民は皆首を翹げて待望して居る。汝若し石を命じて飯（パン）とする能力を振つて、天下の窮民を聚めたら、羅馬帝國を傾けて之に代るのは造作もない。然かして猶太王の位を此の宇宙王國の上に据へて、天下無告の民を拯ふて、其の衣食を給して與れば、其の生活を擔保して與れば、罪は世界の面から自然と消滅するではないか。嗟是は今日の社會主義者の聲であります。基督教者が最も墮ち易い誘惑であります。惡魔は初、野の誘惑に於て此の聲を以て彼を誘ひました。而して同時に世界萬國と其の榮華とを見せまして、汝若俯伏して我を拜したらば、我盡く之を汝に與へよう、神の子で居て神と匹しくある者が、陋しき下界に生れたらせめては世界の王となつて、世

界の榮華を一身に聚めて、汝の祖先ソロモンの快樂を享くるに如くはないではないか。此の世界の榮華と十字架の僇辱と苦痛とは、孰か好んで取るべきかと斯う云ふたのでありませう。是が最初から彼を誘ふ辭でありました。誰でも世界の榮華を受けたい、十字架の僇辱と苦痛を避けたい。是が萬人の至情であります。基督獨我等と異つて居ませうか、我等と異る應は無いのであります。然し彼が此の十字架の苦痛と僇辱とを擇んで、我等の罪の眞の救拯となることが、父なる神の聖旨であります。彼自身の本願であります。彼は實に之が爲に神と匹しくある事を棄てゝ、僕の體を取つたのであります。故に彼は言下に之を斥けて、「サタンよ退け、主たる汝の神を拜し、唯之にのみ事ふべしと錄されたり」と對へたのであります。然し是は未だ傳道の初、十字架が猶ほ甚だ遠く見えて居る時であります。日々其の傳道生活が短蹙して、日々其の十字架が接近し來るに隨つて、此の誘惑が日々其の勢力を加へ來るのであります。故に神は深く彼の心を哀み、其の始めて十字架の背後に於て衣るべき榮光を、彼の即身に顯象して、其の寂寞無聊の心を慰撫したまふたのでございました。斯ほどに顯著な保證を見ても、愈明日十字架に懸ると云ふ晩になると、尙且誘惑を受くるを免れぬ。熱人性の弱きを觀すれば、我等は量りなくゲスセマネの基督に同情を表せねばならないのであります、否基督の爲に泣く耳でない、即ち己の爲に泣くのであります。其時其際基督はペテロとヨハネとヤコブを伴ひ、憂と哀に勝へなくて、彼等に向つて「我心痛く憂ひて死るばかりなり、茲に待て我と偕に目を醒しをれ」と、然う吩咐けて、自分は少し奥深く進み往きて、其の奪ふが如き誘惑に勝つために、膝を曲げて祈禱を爲ました。彼一人の力には殆ど保つまじとするので、天使が天より現はれて、彼に健壯を添へた

ほどでありました。彼は痛く哀んで切に祈りましたので、「其の汗は血の滴の如く地に下れり」とあります。時は宛も厳冬の候であります。尋て彼を捕へて引き出した法廷では、捕手等が焼火を焼て煖まる事が録してあります。此の厳冬の霜降る夜半に、血の滴の如き汗を流して祈ると云ふのは熱切ない煩悶苦痛と察する外はない。彼は三たび祈禱に於て誘惑と戦ひ、三たび弟子の處に返つて見ると、三たびながら弟子は眠に沉んで居ります。彼は其の言ひ効なき狀態を見まして、自己の上の心痛に又弟子の上の心痛を加へ、ペテロを起して申しますには、今宵は大なる誘惑の夜である。我すら殆ど奪ひ去られようとするであるのに「汝等は此く一時も我と同に目を醒しをると能はざるか、(同じ) 誘惑に入らぬやうに目を醒し且祈れ」と、其様言つて、又人性の弱きことを己の上に反省して、「其の靈には願ふなれど、肉體弱きなり」と恕しました、愈危難の迫つた際に「今は寢ねて休め」と云ひて、自分が醒めて弟子を寢かしめたのであります。量り知られぬ同情慈悲。此の有り難き同情慈悲、是が彼の救拯の源であります。實や、彼は最初から此の量りがたき同情慈悲の眼を以て、世上の人類を見て居るのでありました。聖書は善く此の消息を識つて居ります。

イエス出て多の人を見に、牧者なき羊の如く艱み又流離になりし故に、之を見て憫みたまふ。(太十〇三六 可六〇三四)

彼の同胞兄弟たる我等は、此の如く惡魔に誘れて神なる父の家を離れて、還るべき道をも知らず、唯各自己の欲求を追ひ求めて漂ひ歩き、木の葉の風に吹かるゝ如く、滅亡に向つて行くのであります。涕涙も、哀哭も追及か無い。今は唯吾が身一を投げ出して、彼等の身代に立つあるのみであります。自分一人國王の位に座して榮華を受けて苟も彼等を使役するが如きは實に思ひもよらぬ事であります。彼の眞情か其様であります。

此の如く人の子の來るも、人を役ふ爲には非ず、反て人に役はれ、又多の人に代て生命を與へ其の贖とならん爲なり。(太二十〇二八)

彼は此く心を定めまして、十字架に懸つたのであります。同情の極が贖罪となり、涙の終が犧牲の死となつたのであります。如何なる石心鐵腸も、此の基督の慈悲に感じては碎けざるを得ないのであります。

問　如何にも道理至極であります。

答　斯く基督の十字架の犧牲は同情の極でございますから、誠心誠意十字架の救を受くる者は、此深甚の同情慈悲に感ずるので、何樣して其罪を反覆することが能ませう、偏に此身を基督に獻げて、基督の有となし、基督の心を享けて、基督の如く他の犧牲となつて生死したいと云ふ一念が抑へきれ無いのであります。基督と全く同化しなければ已むに已むを得ぬのであります。是故にパウロは、

我神の諸の慈悲をもて汝等に勸む、其身を神の意に適ふ聖き活ける祭物として神に獻げよ最當然の祭なり。(羅十二〇一)

と云ひペテロは、

汝等孝子なるに因て、從前の蒙昧りし時の慾に效ふことなく、汝等を召し給ふ聖者に效ひて、凡の行を潔すべし。蓋は汝等贖はれて先祖より傳りたる徒き行より離しは、銀や金の如き壞る物に由に非ず、疵なく汚なき羔の如きキリストの寶血に由ることを知ばなり。(彼前一〇十五、十八)

と曰ひ、ヨハネも亦、

主は我等の爲に生を捨てたまへり、是に由て愛といふ事を知たり。我等も亦兄弟の爲に生を捨べし。(約壹三〇十六)

而してパウロは前に我等に勸めました如く、自ら聖き活る祭物として、迫

害の手に屠られました。其の辭世の語は是であります。

我今祭物とならんとす、我が世を去る期近けり。我既に善戰を戰ひ、既に馳るべき途程を盡し、既に信仰の道を守れり。今より後義の冕我が爲に備あり、主即ち正しき審判を爲す者其日に至りて之を我に予ふ。

（提前四〇六―八）

ペテロもパウロと同じ迫害者の手に屠られて血祭とされたさうであります。是れが基督の十字架の同化力の一端であります。是の如き同情、是の如き同化力、是れ到底小羊や小牛に望むべきもので無い。唯人と成つた神の子耶蘇基督に於て望むべきのみであります。

問　基督の犧牲は詳に了解するを得たと思ひます。然し茲に疑點は我等が基督信者となり同時に全く罪を離るゝ者であれば格別、然もなければ罪を犯す其の度、又は毎年、昔羔を獻げた如く、基督を獻ぐる必要があるかと思ひます。

答　道理ある質問であります。人は悔改めて基督を信じましても、聖靈を受るまでは全く罪を離るゝことは能ないのであります。其間に犯した罪は其の毎度同じ十字架の贖罪に由て潔めらるゝのであります。即ち錄して

若人（信者）罪を犯さば我等の爲に父の前に保惠師あり、即ち義なるイエスキリスト、彼は我等の罪の挽回の祭物なり。（約壹二〇一、二）

とあります然らば何故に一回の贖罪が、我等の生涯の犯罪の犧牲となるかと云ふ疑問が起りませう、之に對する聖書の說明は是であります。

諸の祭司は日ごとに立て奉事を爲し、聊か罪を除こと能はざる同じ犧牲を屢獻ぐ。然ど此人は一次罪の爲に一の犧牲を獻て、窮なく神の右に坐し、其の敵を承足となさん時を俟り。蓋彼一の獻物を以て潔まる者を永遠全成すればなり。聖靈亦之を我等に證す。蓋此日の後、我彼

等と立んとする契約は此なりと言る後に、主言ひたまはく我が律法を其心に置、その衷に銘し、復其の罪と惡とを我が意に記じと有が故なり。既に此等の赦あらんには、罪の爲に獻ること無るべし。(希十〇十一―十八)

此説明の要點は基督の贖罪の後、神が復び我等信者の罪を「意に記じ」とある一句であります。

問　然う伺ひますと愈疑問が增すのであります。先づ聖書の引用と基督の十字架との關係が安に在るかゝ疑であります。聖書の引用に據ると神が我等の罪を宥すのは我等の心に其の律法を銘する事にあつて、十字架の贖罪と毫も關係を有して居ないのであります。

答　是は如何にも御道理な問であります。聖書の引用と基督の犧牲が、表面上一の關係を有して居らんのは、正に御説の如であります。但し此の聖書の記者が、此の舊約の文(耶卅一〇卅三、四)を引て之を十字架の犧牲に適用した言外の眞意は、謂はふる「律法を其心に置」とは、神は十字架の犧牲の方便に由つて其律法を我等の心に置くと云ふに在るのであります。更に實際に解きますと、律法を其心に置くとは、元來其の衷に神の律法の置かれてある基督の靈を我等の心の中に注ぎ、我等をして此靈の默示に由りて神の律法の何物なるかを知らしむる事實を稱するのであります。

問　然して又次の疑問は十字架以後神が復たび其の罪と惡とを我が意に記じと言ふことであります。若し神が復たび我等の罪を問はんのでしたら、同じ十字架に犯罪の次度依賴する必要はないと思はれます。

答　是にも亦言外の意味があります。即ち神が復たび人の罪を意に記めぬと云ふ記者の眞意は、既に十字架の贖罪が有る以上は、神は我等の罪の救を以て、偏に此の十字架に委任して、此の外復た罪の爲に慮る處なき事を謂ふ

のであります。是は基督の犠牲に全く世から罪惡を深むるの能力あるが故であります。其の能力とは第一に其の犠牲の同化力に由つて、信者に饑え渇く如く義を慕はせ、然る後に之に其の靈を予へて其の渇望を飽かせ、然して全く基督に同化し了せしむるからであります。

問　基督は何様して信者に其靈を與へます乎。

答　彼は墓から復活し、天に昇り、父の右に坐し、其處より聖靈を遣るのであります。聖書は錄して、

節筵の末の大なる日、イエス立て呼はり曰けるは、人若渇ば我に來て飲め、我を信ずる者は聖書に錄し、如く其腹より活る水川の如く流出べし。此く言るは彼を信ずる者の受んとする靈を指るなり。蓋イエス未だ榮を受ざるに因て、靈いまだ降らざればなり。(約七〇卅七—卅九)

と云ひ、尋て

夫イエスは苦難を受し後、多の確據なる證を以て己の活たる事を證し、四十日の間彼等に見え神の國の事に就て語り、又彼等と偕に聚り居て命じけるは、汝等エルサレムを離ずして我に聞る所の父の約束し給ひし事を待べし。蓋ヨハネは水を以てバプテスマを施したれども、汝等は久からずして聖靈によりバプテスマを受くべければなり。(徒一〇三—五)

信者は此後久しからずして五旬節の節會の日に皆聖靈に充たされたのであります。

第四章　奇蹟

問　其の基督が復活したと云ふ事、天に昇つたと云ふ事、其他生前に種々な奇蹟を行つた事が、聖書に記されてあります。是の如き奇蹟が實際有り得る

事でありませう乎。

答　有り得ぬと云ふ理由は。

問　神は既に宇宙萬物に自然法を與へて居るのでありますから、之に反いて之を破壞する樣な事を爲る道理が無いですな。

答　然らば之を爲る道理が有つたら、神は之を爲し得べきでせう。

問　其れは然うです。

答　然らば疑問は神に奇蹟を爲す能力があるかないかと云ふ事でなく、之を爲す道理若くは動機があるか無いかと云ふ事でせう。

問　然うです。

答　然らば神に其の道理又は動機が有れば奇蹟が有りませう。

問　然うです。

答　我等は神に其の道理又は動機あることを認識して居ります。

問　其を承りたいのであります。

答　我等は先づ神が自然法のみを以て宇宙萬有を律すると云ふ學者の定說を拒絕するのであります。神には元來自然法と超自然法との兩者が有つて、物質界には自然法を與へ、精神界には超自然法を與へて居ることを主張するものであります。故に人類以下の自然界、即ち動物植物礦物が、單(たゞ)自然法を以て束縛せられて居ることに就ては異論はない。然し人類は然うでない、人類は本より其の物質の方面に於ては自然法の版圖內の物であります。又其の精神の方面に於ても、其の同類間の普通の交際、即ち賣買、貸借、契約、報酬、權利、義務等の關係の如き、經濟學や法律學を以て取り扱はるべき關係、又は目を以て目を償ひ齒を以て齒を償へと云ふ、若くは怨を以て怨に報ひ、德を以て德を報ひよと云ふが如き正義を主とする道德を以て取り扱はるべき關係は、取も直さず自然法中の因果律其物の版圖內に屬する

物であります。けれども我等の精神の作用は猶ほ此のみに止まらない。我等の精神には權利、正義、報酬の觀念を立ち超えた他の種類の感情、即ち慈悲、恩惠、同情、博愛、犧牲の感情があります。此等の感情は我等自身をして喜んで權利なき義務、報酬なき勞力を身に負荷せしむる物であります。是の感情が即ち我等の精神界の超自然法であります。然れば我等は自然法の規定に遵つて、自由に若干の金額を以て若干の物品を買ひ求むるを得るのであります。然も又同時に超自然法の命令に隨つて、其金額を無報酬で或人に施與することをも爲し得るのであります。其の如く又貸與した物は必ず返却を受くる權利を有つて居ります。然し義務者が之を返すことを得ない場合には、其の義務を解除して與ることも出來ます。我等は已に罪を犯した者に向つて、酬を要求することも出來ます。然し同時に其を寛宥することも出來るのであります。怨に報ふるに怨を以てすることも能ますが、怨に報ふるに德を以てすることも能ます。我等は現在此の二重の法律を家庭の内に併せ用ひて居るのであります。即ち我等の婢僕には自然法を適用し我等の家族には超自然法即ち愛の法を適用して居ります。其の如く又社會に對しても此の二者の適用に由りて生存して居ります。即ち普通の社會に對しては自然法を適用し、特別の社會即ち親戚、朋友、知音の間には愛の法を適用して居るのであります。基督は取も直さず此の愛の法、犧牲の律法、即ち此超自然法の宣傳者であるので、普く此の律法を以て人類に施し、獨り之を特別の社會に限らず、布いて之を普通の社會に推擴さすのでムいます。彼の十字架の死の犧牲は即ち此の愛の法に率つて永劫に向つて我等人類の模範を示したのであります。而て茲に一個堅要の注意點があります。其は他でない其の愛の法の効果であります、別言すれば愛の法に於て神と人と其の効果を異にして居る事であります。其の能力に限り

ある所の人は、其の愛の法の効果も亦限がある、即ち我が超自然法の作用を以て他の自然法を動かす事が能ぬ。之を事實に著はして申せば、譬ば茲に或る人の父があります、其の父に一人の子があります。其の子が父の愛に諂へて父の財囊を持ち出して娼婦に投じ、悉く其の財囊を浪費し、剩へ其の身に惡疾を受けたと致します。若其の子が罪を悔いて歸つたら、父は其の子の罪を宥し、其の財囊を消費した事も宥すことが能ますが、其の慈愛の勢力は其子の感受した惡疾に向つて其の効果を及ぼすことが能ません。唯之を醫師に托して其の自然法の効果に待つのみであります。神に於ては然樣でない、彼は全能者であります、故に其の超自然法の勢力を以て自由に自然法に其効果を及ぼすことが、即ち其の惡疾を醫すことが能るのであります。是れが神と人との超自然法に於ける能力の差異であります。

問　道理はなるほど道理であります、然し疑問は神が果して其の超自然法を適用する者であるが何樣かであります。

答　人が既に或程度まで之を適用して居るのであります。況して之を擴充することを命ずる神が、之を適用しない道理が無い。神は人類の父であります。神の心は反つて人の父の心に求めて得るのであります。或人の歌にも、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひもぞする」とあります。其の如く如何に奇蹟を厭ひ棄る學者でも、其の愛子の難病の爲には、奇蹟の治癒を渇望して居ります。是が人の親の至情であります。人類の父たる神の心も亦然うであります。基督は此の神の心に適ひて、罪の赦に併せて治癒の奇蹟を行つたものであります。彼は然して神の聖旨に遵ひ、盲者に見させ、聖者に聞かせ、瘖者に言はせ、跛者を歩まするなど、種々の奇蹟を行ひて、無告の窮民を救ひ、最後に萬民の贖罪の犧牲として、十字架に懸られたのであります。此の十字架の死は即ち彼自身の超自然法の究極的發揮

であります。若し神が獨自然法のみの神であつたら、神は唯正義の律法の要求に遵つて、唯罪を罰するあるのみで、其結果として人類は盡く滅亡に定められて、而も誰をも怨むことは能ないのであります。唯神は自然法の神である。同時に又超自然法の神であります。故に神の國には罪の刑罰があると同時に、又罪の寛宥があるのであります。彼の基督の十字架は、神の自然法の要求（刑罰）と、其の超自然法の恩賜（贖罪）とが、表裏合體した顯象であります。同時に又自然法の犧牲として死にたる彼は、超自然法の初の實として復活を受けたのであります。

第五章　沒式（バプテスマ）のこと

問　奇蹟の理は略了解いたしました。然れば今悔改めて基督の贖罪を信ずるには何樣すれば可いのです乎。

答　基督の贖罪を信ずるに方法があります、其の方法は信じて沒式（バプテスマ）を受くることであります。

問　沒式とは如何なる事を行ふのです乎。

答　名が實を表はして居る通り、水に沈めらるゝことであります。我等信者の主耶蘇基督が、預言者ヨハネに即き、ヨルダン河で沒式（バプテスマ）を受けました。是れが基督信者の沒式の起原であります。

問　如何なる意味のあるものです乎。

答　是は罪の身の死と葬と復活を意味するものであります。此の沒式は元と異邦人の改宗の儀式として、猶太教が用ひて居たのを預言者ヨハネが神の聖旨に適ひて、之を猶太人の悔改、即ち赦罪の儀式として採用し、基督亦之を信者が其の贖罪を受くるの儀式として採用したものであります。

問　贖罪を受くるの儀式とは、

答　羅馬書が說明して居ります。

イエス、キリストに合んとて沒式を受けし者は、即ち其の死に合んとて之を受けしなるを汝等知らざる乎。故に我等其の死に合ふ沒式に由て彼と同に葬るゝは、キリスト父の榮に由りて、死より蘇されし如く、我等も新き生命に行むべき爲なり。若我等彼の死の狀に等からば、亦彼の復生にも等かるべし。我等の舊人彼と同に十字架に釘らるゝは、罪の身滅びて、今より罪に役さるが爲なるを知る。蓋は死し者は罪より釋さるればなり。(羅六〇三—七)

と云ひ又哥羅西書にも

汝等沒式を受て彼と同に葬られ、亦死より彼を蘇しゝ神の大能を信ずるに因て、彼と同に蘇されたり。(西二〇十二)

とあります。故に基督の沒式を受くることは、之に由つて其の十字架の死を各己に受け取ることであります。十字架の死を受取るのはパウロの救たる如く、新しき生命に復活するためであります。故に基督は勅して、

信じて沒式を受くる者は救はる。信ぜざる者は罪に定めらる。(可十六〇十六)

と曰ひました。

問　唯一刹那、水に入つて救はるゝとは如何な譯です乎。

答　其の中に罪の身の死と葬と復活とがある故であります。

問　何樣して其の中に死と葬と復活とがあることを得ます乎。

答　其中に五官の閉止があります。五官の閉止は即ち死であります。沒式は刹那に縮めた死の縮圖であります。

問　其の唯一刹那の死が、何樣して永遠の死から人を救ひます乎。

答　是は唯基督の贖罪を「信じて、沒式を受くる者は救はる」と命令しました

基督の聖なる約束であります。信者は唯其の約束の確實を信ずるのであります。予思ふに「信じて没式を受くる」と云ふ事は、二事の樣に見えて居て、其實は一事であります。其意味は没式は信仰の事實であります。没式なければ信仰はない、信仰があれば没式がある。此の二者は一事實の兩面即ち精神と事實を構成して居るのであります。故に信仰なき没式もなければ没式なき信仰もないのであります。雅各書が信仰と行爲の關係を説いて、

身若し靈魂離るれば死ぬる如く、信仰も行離るれば死るなり。(各二〇二六)

と曰つたのは、切實に信仰と没式の關係に當つて居ると思ひます。

問　宗教上の事物は靈の事物でありますから、儀式を藉らないで信ずることが出來るやうに思はれますが。

答　王陽明は知行合一と云ふことを主張して行はざれは知らずと申しました。

是は行爲なき智識は唯概念たるに止まつて、眞の智識ではないからであります。如上の雅各書は信行合一を主張して、信仰若し行爲を兼ざるときは則ち死るなりと申しました。是は行なき信仰は唯一片の感情、希望的感情に止まつて、意志的價値を缺いて居るからであります。眞の信仰は必ず行爲を要求する是は心識上の自然の約束であります。故に古の求道者は皆我救はれん爲に何を行すべきかと曰ひ、使徒ペテロは之に答へて、「汝等各悔改て罪の救を得んが爲に、イエスキリストの名に由て没式(バプテスマ)を受けよ、然ば汝等も聖靈の賜を受くべし」と申しました。彼等は之を聞て齊く基督の没式を受け、斯くして聖靈を受けたものであります、此の如く信ずれば行爲と成らねば已まないのは、潔白な良心の要求であります。猶ほ愛情は必ず結婚を欲求し慈悲は必ず施與を預期するのと同じであります。結婚せねば滿足せぬ、施與をしなければ安心がない、是は愛情は一體となるを待つて始

めて滿足し、慈悲は施與することを待つて、始めて充實せらるゝからであります。信仰も亦斯の如く絶對に神の儀式に服從することを待つて、始めて滿足するのであります。結婚なき愛情、施與なき慈悲、儀式なき信仰は、其自身に於て到底不完全を免れない未だ意志的價値を有するに至らないのであります、又儀式と謂ひ、行爲と云ふ、別事の如く見えますが、均く內心の外面に發露した道德的事項であります。神に爲るを儀式と謂ひ、人に爲るを行爲と云ふ、宗教的稱呼と社會的稱呼との差に過ぎないのであります。

問　其は餘りに儀式に重を置き過ぎて、精神を輕ずる弊害はありませんか。

答　是の如きは精神と儀式とを別事と見たから起る疑團であります。既に反覆した通り、此二者は實は一事で儀式は即ち外面に發した精神、精神は內面なる儀式であります。故に儀式を重ずる程度に由つて、其の精神の程度を衡ることが能るのであります。其は恰も施與の多寡に由つて、其人の慈悲を衡ることが出來るのと同然の理であります。是故に精神即ち是れ儀式、儀式即ち是れ精神であります。贖罪の信仰は即ち没式（バプテスマ）で、没式は即ち贖罪の信仰であります。二者は二にして一であります、之を別つは理に合はない。且凡基督を信ずと申す者は、一切基督の誡命と典禮の下に絶對服從の誠實を投じて、而（そ）して其の救拯を求むべき者であります。絶對服從、是が基督信者の謙卑なる精神であります。苟も基督の誡命を論じ、儀式を是非して、强て之を避けようとするのは、信者の分際でない、未だ基督を信じないのです。ヤコブは此の如き輩を痛く規（いさし）めて、

> 汝若し律法を議せば、律法を行ふ者に非ず。律法を立て人を議する者は惟一なり、彼は救ふこと滅すことを爲し得る者なり。汝誰なれば隣を議するや。（各四〇十一、十二）

と曰ひました。是故に基督の律法を是と云ひ非と云ふ者は、此の律法に由

りて救ふこと滅すことを爲し得る所の、惟一上帝の位に在つて爲すのであります。基督すらヨハネの沒式を議せず、之を天より出た物として、之を受くるを義務なりとして、ヨハネ自身の辭するにも管らず、全く之を受けたのであります。況して我等基督に由つて救はれんと欲する者が、我を救ふ其の基督の律法を是と云ひ非と云ふ當はない、唯絶對に服從して、其の救を受くるまでゝあります。絶對服從、其の中に救拯があります。信仰とは絶對服從の別語であります。

問　御趣意好く貫徹して居ります。然し世間の基督信者は、果して皆其の沒式（バプテスマ）を受けた者でムいますか。

答　受けないのです、之を受けたものは僅々數ふるに足りない程です。或は之を受けましても、其の救拯の能力を棄てゝ受けて居ります。此は猶ほ實は受けないのであります。或は沒式（バプテスマ）を厭ふて額に點滴を受けて居ります、其他は全く之を拒絶して居るのであります。

問　如何なる理由に由りますか。

答　理由は無い、唯口實であります。其の口實は詳しくは拙著バプテスマ考に列擧して、一一之に批評を加へて置きました。今茲に其の要旨を摘めば、沒式（バプテスマ）は救拯に關係はない、既に救はれた者が受くる所の禮典である。故に沒式を受るも可し、點滴を受るも可し、一切受けぬも亦宜しいのだと云つて居ります。然し何樣して既に救はれたのですが。聖書は信じて沒式を受くる者は救はれ、信せざる者即ち沒式を受けざる者は、罪に定められるとあります。故に聖書に在つて救はれた者とは、沒式を受けた者であります、彼等の謂ふ所の既に救はれた者とは、神の救拯とは關係なく、唯自分勝手に救はれたと定めた者で、其實甚だ危險な事物であります。然らば自分勝手に何樣定めたかを質すと、曰ひます、人は悔改むる時に既に己に聖靈を

受けて居る。即ち既に救はれて居る。我等が悔改むるのは神の大能に由ると曰ひます。悔改が神の大能に由ることは聖書に記して居り、我等の實驗も亦之を證することで論はない。然し悔改めしむることと、聖靈の沒式（バプテスマ）とは別であります。故にペテロは「沒式を受けよ、然ば汝等も聖靈の賜を受くべし」と訓へて居ります。若し聖靈の賜を受けて悔改めましたら、再び聖靈の賜を受くることは無いのであります。若悔改めて沒式を受けねば、聖靈を受くるものでないならば、悔改むる時聖靈を受けたと云ふことは虚妄であります。當時サマリヤの信者もエペソの信者も、悔改めて沒式を受けて、然る後聖靈を受けて居るのであります。沒式は前に聖靈を受けたと云ふのは、唯イタリヤ隊の百人長コルネリオの場合のみであります。其すら悔改めた際でなく、其よりも甚（はな）だ後で、ペテロを自宅に聘して其の說教を聞て居る際であります。此の聖書に見ゆる唯一の例は即ち除外例と見るべき物であります。其の他は皆ペテロの訓へた順序に由る者であります。第一に基督から然樣であります。彼は先づ沒式を施すヨハネに就て、ヨルダン河に其の沒式を受け、斯くて水から上つたとき、始めて聖靈を受けたのであります。其の使等たちも亦皆然樣であります。彼等は皆沒式を受けて基督に屬いた者であります。然も彼等が聖靈を受けたのは、基督の死後であります。猶太の信者、サマリヤの信者を初め、大凡初代教會の信者は皆亦同樣であるのであります。沒式を受けないで聖靈を受けた、救はれた、と今日の教會が一口に言ふのは、予は斷じて信じ無いです。

問　然らば其のコルネリオとか云ふ人の如く、聖靈を受けし人は既（はな）や沒式（バプテスマ）を受くる必要はありますまい。

答　ペテロは猶ほ「我等の如く既に聖靈を受けたる人に、誰か水を禁じて沒式を受ざらしむる者あらんや」と、其の水の沒式を受くる資格ある者なるこ

とを論定した上、之に沒式を施しました。是に由つて「人は水と靈とに由つて新に生れずば神の國に入ること能はず」(約三〇五)と云つた理由が解くるのであります。水の沒式は過去の罪を消滅し、聖靈の沒式は將來の罪を潔除するのであります。

問　過告の罪が消滅すると云ふに、何か兆候でも有りますか。

答　有あります。聖書に言ふ通り、「罪を憶ゆる」ことが無くなるのであります。勿論罪の事實の記憶は存して居ますが、罪の恐怖、懺愧、沈痛、苦味が一時に無くなるのであります。何樣して然るかと云ふと、絶對に神の約束を信じて、其の命令を充實したと云ふ安心から起り來るのであります。細かに言へば、神の約束を信じて水に沒められた事實に由つて、昨の吾は全く滅んで、新なる人と生れ更つて居ることを感ずる。罪の恐怖、痛苦の代りに、平安、希望、瑞喜、感謝の念が湧き出るのであります。舊き天地は消滅し去つて、新しき天地が顯現し來るのであります。從來罪惡、煩惱の眼で汚れて居た自然の光景が、一變して神の前に嚴肅に、敬虔に、絶對服從の相貌を表はして居る、殊勝神妙な形容が顯はれて見ゆるのであります。同時に唯人類ばかり、其中に在つて神に背き、本を離れ、何處から來て何處に往くべき者とも知らず、己がし〻罪惡の巷に漂つて居る、憐むべき狀態が截然見えて、何樣しても之を救はずに見て居ることが能なくなるのであります。

第六章　聖靈の賜

問　然らば沒式(バプテスマ)を受けたら滿足ではありませんか。

答　否、否、水の沒式を受けて新に生る〻は事實でありますが、其の新なる身を再び舊うする罪の性質が猶ほ人の中に遺つて居ります、其の罪性を滅し

盡すのが即ち聖靈の沒式（バプテスマ）であります。

問　何樣すれば聖靈の沒式を受くるものですか。

答　「汝等各悔改めて沒式を受けよ、然らば汝等も聖靈の賜を受くべし」とペテロの言へる如（とおり）であります。

問　水の沒式を受ければ直に聖靈を受くることが成ますか。

答　人々の信仰、渴望の程度に隨ひて遲速の差はあります。之を渴望するに道があります、先づ極點まで自個を窮めて、自個の無能力を觀し全然自個を非定し盡すのであります。微塵にても自個を恃む念存する間は決して賜はる物でないです。

問　之を受くるに何ぞ確實な徵候でもあるものですか。

答　基督は猶太人の首（おさ）たるニコデモに告げて、

風は己が如（ごとく）に吹く、汝其聲を聞とも何處より來り何處へ往くを知らず。

大凡靈に由りて生るゝ者も亦此の如し。（約三〇八）

と曰ひ又、サマリヤの婦に告げて、

我與ふる水は其中にて泉となりて湧出、永生に至るべし。（約四〇十四）

と曰ひました。風の嘘吹と云ひ、泉の沸涌と云ふ、孰も比喩語であります が、然し同時に又事實であるのは不思議であります。然れば聖靈を受くる男子の胸には生理的嘘吹、女子には沸涌を感ずるのであります。古代の信者は皆此經驗を有つて居て、聖靈の明白な證據を擧げて居ります。近世の信者は此等の經驗を拒絕して「其の何處より來り何處に往くを知らず」とあるを根據として、受靈に就いて無感覺說を立てゝ居ります。其說に據れば我等は何日、如何にして聖靈を受けたかと云ふことを知らぬ。然し確かに之を受けて居る、聖靈は結果に由つて知らるゝと、斯樣に云ふのであります。聖靈の事實が結果に顯はるゝ事は眞正であります。然し其の結果と云

ふのは、單に人が惡を捨てゝ善に遷ると云ふが如き、單純な倫理的變化でない、此の如きは必ずしも聖靈の力に籍らなくとも出來ます、世間は何程でも其實例を提供して居ります。聖靈の果は獨此に止まりません、聖靈の果とは人類の性質の中に新に神の性質が入り來つて、人類をして神の子となり、神の如く世に在らしむるのであります。其の道德的價値は完全なる精神的自由であります。「主の靈ある所には自由あり」とある如くであります。又其の存在の狀態に就ては、「吾が與ふる水を飲む者は永遠渴くこと無し、且吾が與ふる水は其中にて泉となり、湧出で永生に至るべし」(約四〇十四)と證してあります。然るに唯悔改めたばかりで、未だ聖靈を受けぬ信者は、直に信仰の饑渴を感ずる。悔改の當時の感激、感謝何日しか過ぎ去り、甘露の如き瑞喜の涙は乾き盡して、如何に努力しても復た湧かない。復た其の甘露を嘗めることが出來ない、途方なしにリヴイヴルと稱する似て非なる宗教劇を演ぜぬを得ないのであります。而もリヴイヴルの水を飲んだ者は、又忽ちに飢渴を覺ゆる忽ち又リヴイヴルを興す。遂には復たリヴイヴルを起す元氣が無くなつて、又も舊の我に返るのであります。又其の治療的威能に就てはパウロの受靈の場合が其です。彼が其の精神を盡して敵對しました基督の光榮に射られて視力を失ひ、心悔恨に充ちたる際、アナニヤと稱ふ敬虔な信者が彼の宿所に參りまして、「兄弟サウロよ汝の來れる路にて現はれし主イエス汝か再び見ることを得、且聖靈に滿されん爲に我を遣はせり」(徒九〇十七、十八)と申しました。其の時忽ち彼の目より鱗の如き者脫て再び見ることを得たり」とあります。是は彼聖靈の己に滿つることに由つて、其の治癒を受けたのであります。是の如く聖靈を受くる者は必ず嘘吹、沸涌、若くは治癒等の如き生理的、又物理的の徵候を經驗すべきものであります。然し聖靈の恩賜に貴ぶべき所は、其の心理的變化

に在るのであります。此點に關して彼等は「靈の結ぶ所の果は、仁愛、喜樂、平和、忍耐、良、善」(加五〇二二)てふ聖語を引きます。然し彼等に靈の結ぶ實の無き事は、「忿怒、分爭、結黨、宗派」(加五〇二一)と云ふが如き肉の行爲に由り顯著でてあります。聖書は「キリストの靈を受けざる者はキリストを主と呼ぶこと能はず」と宣告して居ります。基督の靈を受けたと稱して基督の律法を廢し、其の命令を拒絶し、勝手に己が宗派を立つる者は基督の靈に反對する者であります。

問　聖靈の事實に就て明白なる教を伺ひたいものです。

答　聖靈に由る心的變化に普通的、特殊的の二種があります。

問　先其の普遍的變化とは。

答　何人にも同一樣なる變化、即ち靈性の解脫、即ち精神的自由であります。基督は「肉に由りて生るゝ者は肉なり、靈に由りて生るゝ者は靈なり」と曰ひました。聖靈を受くれば肉なる人が一躍して靈なる人に飛ぶのであります。別言すれば自然の人格が變化して、超自然の人格となることであります。始の人アダムが一たび惡魔の誘惑を受けて、永久後世子孫に遺傳した所の罪性の主宰的權力を、聖靈が來つて破壞し、囚はれた靈性を救ひ出し、之を始の人の自由に復らせ、且又自ら其の靈性と俱に內在して之が後援となるのであります。是は我等の肉は既に始の人の純潔を缺いて惡魔の巢となり、情欲と罪惡に由つて養はれて來て居りますから、罪の增す所には恩も亦愈增るとある如く、靈性の保護者として、聖靈無きを得ぬのであります。是の保護者が有るに由つて、始めて人は誘惑に克ち得て餘ある自由の人、靈の人、神の子となるのであります。

問　神の靈を受くれば既や誘惑を受くることはありませんか。

答　聖書に據れば基督に於ける誘惑はヨルダン河で沒式(バプテスマ)を受けて、聖靈を受け

た當時から起つて居ります。惡魔が誘惑の全力を盡して誘ひ墮さうと欲するのは、救の質なる聖靈を賜はつた者に在るのであります。宛も牧者が九十九の安全な羊を置て、迷つた一頭を狂して尋ぬる如く、惡魔も九十九の不確實な信者よりも、確實な一人の信者に向ひます。而て惡魔が如何に彼を誘ふかであります。聖靈を受けた者には傲慢があります、我獨り神の靈を受けて居る。我は眞に此世から聖め別たれた者、神の子であると云ふ傲慢であります。惡魔は的然基督に向つた時の如く、彼にも言ひます、卿かもし神の子であつたら、此位の事は神は之を許すだらう。若し許さないならば、其の事の中途で卿を救ふだらう。卿は既に神の子である、聖靈を受けて居るからと斯樣に言つて彼の生來の弱點に附けこんで、其の慾情を煽動するのであります。彼は基督にも「汝若神の子ならば此石を命じてパンとせよ」と曰ひました、彼は彼等の饑渴の情に瀆いて、然までにもあらぬ饑渴を、十倍乃至二十倍の饑渴となし、罪の快樂を同じ程度に倍乘して彼に見せ、之を棄るの甚だ惜むべく、之を懷くの甚だ甘美なるを念はせ、遂に一時恍惚無分別の境界に入らしむるのであります。其時我は偏に己を虛うして聖靈に投入し、絶對に聖靈に信賴するとであります。而ると其の奪ひ去る樣な猛烈な誘惑も、取り着く島が無くて、漸漸徐徐と經過する、其の經過した後を見ると、恰も浮雲一過日月の明復た皎皎として八荒を照す事の如く、理性の光は漸徐に再び我に返つて、胸中が喜び躍るのであります。而して又若し平日の修業に於て理性と感情とを峻別して、其の差別が明截になつて居る時には、理性は自ら雄飛して、感情は自ら雌伏して居て、惡魔が感情を動かさうとする場合にも、恰も基督の曠野の誘惑の場合同樣、理性の一喝、直に之を遏止するを得るのであります。全く變つて居るのであります。從來罪の奴隷、誘惑の服從者、誘惑に出會つては一たまりも爲

なんだ者が「眞理は汝に自由を與ふ」と言はれた如く、今は此の如き斬新な自由な人となつて居ます、「彼を信じ其名を受る者には、之に神の子となるべき權能を與ふ」と、彼のヨハネが言つてる如く、大凡神の靈に導かるゝ者は、是れ即ち神の子なり」と彼のパウロが言つてる如く、我は今日其の神の子となつて居るのであります。斯ばかり尊く有り難い奇瑞な事が、此の世の中に有るのであります。全く聖書にある如く、全く生れ變るのであります、喜び踊らざるを得ないのであります。此の靈性の自由、是が聖靈の普通の賜であります。大凡聖靈を受くるものは皆齊く此の賜を受くるのであります。

問　特殊的とは。

答　此の靈性の解放を受くる外に各人各種の聖靈の能力を加へらるゝのであります。

或は靈に由りて智識の言を賜り、或は同じ靈に由つて信仰を賜り、或は同じ靈に由りて病を醫す能を賜り、或は異能を行ひ、或は預言し、或は靈を辨へ、或は方言を言ひ、或は方言を譯するの力を賜はれり。

（哥林十二〇八―十）

とあります。是故に聖靈を受くるのは新しき宗教的天才を稟くることであります。聖靈を受けた者には、必ず此の數者の孰れが其一の能力を新に受くるのであります。故に聖靈を受けたと稱する人は、獨り普通なる自由の賜の外、更に特殊なる能力の賜を證さなければなりません。其の證明が無いならば、其の聖靈を受けたと云ふことが一人の私言に止まつて、聖書的公證とはならないのであります。

問　詳に聖靈の神秘を伺ひたい。

答　喜はしき御尋を受けたと存じます、從來聖靈に就ての明敎がない。其說は

甚だ曖昧、模稜、渾沌たる物、又甚だ區區、煩瑣、奇怪なる物であります。

問　是故に何人も自分が聖靈を受けた者であるか否かと云ふことが熟〻分らない、受けた樣でもあり受けない樣でもあり、受けたと思へば受けて居る。受けぬと思へば受けて居ない。如何樣にも感せられて、人には受けてると云ひ、自分には之を祈つて居ります。是が現時聖靈に就ての消息であります。勿論この聖靈の說たる、基督敎の奧義、聖書中の神秘學に屬する物でありますから、容易に了解し難いのも怪しからぬ事であります。予は特別に之を說明すべき聖旨を受けた事を感じますから、予の分際を盡して、能ふ限り聖靈の事を說明したいと思ふて居ります。先つ第一に聖靈は基督の靈であります、即ち智情意の心識を有した人格者であります。聖靈の働には此の三樣の動作が明かに見らるゝものであります。其の情たる方面から見れば、聖靈は情であります。基督が同情の化身であつた如く、基督の

靈は同情の靈であります。我等に喜ぶことが有れば聖靈も同に喜び、我等に悲あるときは、聖靈も同に悲しむのであります。蓋し世間普通に屬する人事の歡喜は、親戚、鄕黨、朋友などが、共に喜んで與れますので。餘り聖靈の歡喜を感じませんが、特別に屬する歡喜、即ち孤獨秘密なる歡喜、罪を悔ひて赦された時の瑞喜、誘惑と鬪つて之に打ち克つた時の瑞喜、福音の眞理を發見した時の瑞喜、祈禱に由りて神を合致したる時の瑞喜、神と共に在ることを感ずるの瑞喜、特別に基督の受難に感激するときの感涙、此の如きは他人の同情も言語も達することの能ない、獨覺秘密の歡喜であります。實に得も言はれぬ歡喜となつて此際胸の中に湧き溢れ、我が喜を滿す者は此の聖靈であります。是故に聖靈を比べて歡喜の膏と別稱するのであります。又悲哀に於ても然うであります。人生は涙の谷で、人間の同情で慰藉を與へ得る普通の悲哀の外に、其の同情の達し得ない孤獨な悲哀

が、幾何あるか知れないです。縱令ば普通の悲哀であつても、之を受けた人の境遇が特別不遇である場合には、特別の悲哀となるのであります。寡婦にして孤兒を失ひ子無くして夫を失た場合が其であります。此外社會に棄てられた人、教會に棄てられた人、不治の病や貧の爲に棄てられた人です。斯る境遇に遭遇した人ほど憫むべき者はない。四隣の言語も涕涙も到底此人の悲哀に通するとが出來ない。彼は天地に棄てられた者と思つて居ます。彼若神我と俱に在すと云ふことを信じないならば、實に廣い天地の間に、唯茫獨の身であります。彼は世界の孤子であります。此の孤子と共に泣いて彼を憫み、彼を慰め彼を温め活かす者は、果して何物であります か。基督の靈であります、唯基督の靈であります。基督其弟子と別れて十字架の死に就くとき、「我汝等を棄てゝ孤子とせずと曰ひ、「慰藉師(なぐさむるもの)を汝等に遣らん」と曰ひ、其の如く聖靈として彼等に降臨致しました。基督の靈が慰藉師であります。パウロは何と申しましたか、「聖靈も亦我等の脆弱を助く、我等は祈るべき所を知らざれども、聖靈自ら言がたき悲歎を以て我等の爲に祈る」と申しました。我等の孤獨寂寞の際に、我等が無聊の心情を酌み、我と共に我が爲に泣き、我と共に呻(うめ)いて神に禱る者は、獨此の基督の靈であります。此の外何等の依頼も無いのであります。若し吾が孤獨無聊の際に、聖靈の慰藉が無いものならば、我は眞實孤獨であります。天に哭しても天は聽かない、地に哭しても地は答へない、人はと云へば皆他人であります。其時其際、人は果して何樣するでせうか。恐くは其の悲哀に打ち勝てないで自殺して果るのではありますまいか。此かゝる無聊の時にこそ人は自殺するものでせう。基督信者は有り難い。基督の靈に悲愛の涙を拭ぐはれ、世間の人の十中八九死ぬべき際にも、猶ほ生命を存へて、再び樂い天地に返る時節を待つのであります。如上は情としての聖靈の働であ

ります。又次に聖靈は智慧であります。前に謂ふ所の慰藉師は、同時に又眞理の靈と稱はれて居ります。錄して

彼即ち眞理の靈の來らん時、汝等を導き凡の眞理を知らしむべし。蓋彼己に由て語るに非ず、其聞し所の事を汝等に言ひ、又來らんとする事を汝等に示すべければなり。(約十六〇十三)

とあります。彼は如何にして我等に萬事を敎へますが。彼は我等が萬事に接するに當つて、眞先に智慧の光明を射し示します。直覺として初一念を我等に啓くのであります。故に基督は弟子に敎へました「人汝等を解さば如何何を言んと思ひ煩ふ勿れ、其時言ふべき事は汝等に賜はるべし。是汝等自ら言ふに非ず、汝等の父の靈其衷に在りて言ふなり」。(太十〇十九—二十)其の直覺は斬新なる天啓であることもあれば、聖書の語句の指摘であることもあります。聖靈を受けまして先づ尊く有り難い事は、內なる心が照らされて、神の事物が思惟するに隨つて俄に鮮明に分るやうになつて居る事であります。例せば茲に基督敎の敎義に就て、何等かの疑問が起る、直に之に對する意見の直覺が、聖靈に由りて啓示せらるゝ。徐に聖書を開いて見ると、果して符節を合せた如くあります。是に由りて「我等己に由りて自ら何事をも思得るに非ず、我等の思得るは神に因る（哥後三〇五）とある、パウロの言の眞實を思ひ當るのであります。是故に聖靈を受くることを、「光を受くる」とも稱して居ります(希六〇四)。而て又日常の世事人事を如何に處するかと云ふと、亦一一聖靈の直覺的啓告を受くるのであります。考へて見ると人間は實に愚な者であります。萬事を明め知つた樣な顏を爲ながら、自己の上、家族の上に、一刻の後に起り來る事を完く知らないのであります。善が來るか惡が來るか、不幸が來るか幸福が來るか、天災が來るか人禍が來るか、盜が來るか病が來るか、飢が來るか渴が來るか、

生か來るか死が來るか、誘惑が來るか試錬が來るか、原因が來るか結果が來るか、平安が來るか不安が來るか、希望が來るか絶望が來るか、慰藉が來るか苦痛が來るか、訃音が來るか福音が來るか、友が來るか敵が來るか、善が來るか惡が來るか、一切識らない。識らないで平氣で居る。其が來て始て驚き騷ぎます。其時内から其に對して取るべき所置の直覺を射し示す者が、即ち聖靈の啓告であります。此の直覺に隨つて事を處すれば、甚だ心に平安を感ずるのであります。然るに動もすれば、此の第一の聲に對し、第二の聲が勃興して、直に第一の聲を呑うとかふります。此の第二の聲は即ち利害の念、利己的打算、即ち是れ惡魔の聲であります。此の惡魔の聲が第一の神の聲に對して、盛に鬪ひ進んで來る、互に消長があるのであります。然し其の鬪が止んで見ると、利害の念は跡も無く消滅して、義務の念が獨り儼として存在して居るのであります。謂はふる浮雲一過、太陽の明舊に由つて赫躍たるのであります。若其の決斷を着くるを欲せざる時、若くは之を千慢に附して置くときには、夜半の寂寞、内猶は闇く空しき時に、滿天の星の如く、最初一たび顯はれた其の靈覺が、其自身を胸中に燿き示すのであります。我は到底此の命令の權威に反くことが能ない、唯起て此の命令を實行する外無いのであります。此の命令に反いて祈禱をしても、其の祈禱は亦我が胸に投返さるるのであります。之に反いて事を處しても、必ず後悔の念が起る。一倍餘計な事を爲して、之が賠償を爲さねば平安を得なくなるのであります。此の如く聖靈を受けた者は、一時一刻の聖靈の啓示、即ち直覺に率由して、我が上に變化し來る新しい事物に應接して、前者を送り後者を迎へ、一日一日新生涯を切り開いて行くのであります。茲に一歩を踏み外すと、初は唯一歩二歩の差違でありますが、遂には千里の差違を爲して、天國の門に到るべきものが一朝俄然として地獄の深淵に

臨むのであります。聖靈の啓導は明晰であります、然し惡魔の誘惑も均しく強いのであります。殊に其中には甘美なる肉慾の快樂があります。餘程深く考へて去就を決しないと、後悔前に返らない、永久の滅亡に入るのであります。此の故に最初の一歩が極て大切なのであります。滊車には軌道がある、滊船には航路がある、人生の旅行には軌道もなければ航路もない。唯聖靈の啓導に頼つて一刻一歩と正しき進路を發見するのみであります。然して又特別人の惑い易きは、外界の變化に對する上でなく、自己自身の變化に對する上に於てゞあります。外界の變化に對しては自若たることを得ましても、自身の變化に對して動轉しない者は鮮い。他人の危急には靜に之に當り得ても、自身の危急には起ても居ても耐らない、詮ずる所弱いのである。聖靈は其の弱きを知つて、强ちに之を耐へよとのみは言はない、同時に其の弱を憐み、或は陽に或は陰に之に對する準備を其となく與へて置いて、變事の俄然と起つた時に、度を失ふことなからしむるのであります。聖書に「神は信なる者なり、汝等を耐忍ぶこと能はざる試誘に遇せじ。汝等が其試誘を耐忍ぶことを得んが爲に、其に添へて逃るべき途を備へたまふべし」(哥前十〇十三)とあるのは經驗的事實であります。人生の旅行は取も直さず闇夜の旅行であります。一寸前が暗黑であります。我が往く路は正直であるか、右に轉じて居るか、左に折れて居るか、全く分らない。我が前に石があるか、崖があるか、窟地があるか、溝渠があるか全く分らない。身を向け、足を運ぶに困つて居る其時、天の一邊から忽然電火が閃めいて、遠方は然うではないが、百歩の前までは鮮明に照らすので、其の閃めいた電火の跡を模つて、足を運ぶのであります。聖靈の啓示は此の闇夜の旅行に於て、閃めき示すところの電火であります。我等は斷えず此の電火の閃に由りて、一刻一歩遲々として此の人生の行路を辿るのであります

す。若聖靈の啓導を待たず、若くは其の啓告を聽かずして邪徑に踏みこんだら、大變な事になります。神より見離されて惡魔に附されて禍難が起つて危急存亡の機に臨んで、始めて驚き慌てゝ神に叫び、其非を悔ひ、辛うじて救はるゝを得れば幸であります。然し其の正しき路まで踏み返るまでには、餘程時間を費さねばならぬ。又其處には數次惡魔の誘惑を受けて、幾度か仆れんとする憂目を見るのであります。是故に重ねて曰ひます、一歩の誤が大事であります、終に千里の迷に至らぬやう、慎みても猶ほ慎むべきものであります。智たる聖靈の働は略斯の如くであります。次に聖靈は意志であります。意志たる聖靈は權能と稱はれて居ります。「彼を受け其名を信ずる者には之に神の子たる權能を與ふ」など見えて居ります。誘惑に克ちて惡魔を防ぎ、己に克ちて、其の十字架を負ひ、諸惡を斷ち、諸善を行ふのは、即ち此の權能の作用に出るのであります。有力なる信仰に根して奇蹟異能を行ふのも、此の權能の作用であります。其の誘惑に克つ次第は、既に前に述べた如であります。聖靈の智、情、意の働は略此の如くであります。前に引きました聖靈の能力の差別も、此の三の作用を明にせるに過ぎないのであります。即ち「或は靈に由りて智慧の言を賜はり、或は同じ靈に由りて智識の言を賜はる」とあるは、其の智たる作用に就て言ひ、「或は同じ靈に由つて信仰を賜はる」とあるは其の情たる作用に就て言ひ、「或は同じ靈に由りて病を醫す能を賜はり、異能を行ひ」とは其の意志たる作用に就て言ひ、「或は預言し或は靈を辨へ、或は方言を言ひ、或は方言を譯する能を賜はれり」とあるは、再び其の智と意の作用に就て言つたのであります。聖靈を受けたる者は、必ず此等の一を握つて居ります、握つて居る當であります。若握る所なくして聖靈を受けたりと言ひ、他の質問を受けて答辨に躊躇する分際では、其の聖靈を受けたと云ふ事實が、猶ほ

疑問に附すべき者であります。然て然らば同じ靈の賜に由りて然様に作用の異なるは何の故かと云ふ疑問が起りませう、聖書は之を説明しません、予私に案ずるに是の差異は受くる人の天分の差異に由る事と思ひます。智の人は專ら智を用ひのるでありますから、聖靈は其人の長所と協働して智の靈となるのであります。若し又情の人ならば同じ理由によりて情の靈となり、意の人ならば意の靈となるのであります。予は今協働と申しました。然し動もすると我等は我が限ある智情意の力を壓伏して無能ならしむるやうな大事件に出會するのであります。然るときに我等が之に對ふる惟一の道は、己の小智、小情、小意を悉皆打棄て、靈の内に隱れて了つて、唯靈の働に委任して了ふ事であります。其時靈は我に代つて吾が手足全體を使役して、自在に無礙に事に處して其の難局を濟すのであります。後になつて當時の危險を回顧して、彼の時何様して彼んな急所切所を切り抜けて、巧く通つて來たかと思ふと、今でも此身が其の危險の前に在る心地して、思はず悚とするほどであります。此かる經驗は自然の人にも偶之ある事であるが、自然の人を此際に啓導する者は、無意識即ち本能であります。聖靈は本能よりも一倍有効で確實で、意識的活動を與ふるのであります、本能には過失ないとは期し難い、聖靈の啓導には決して過失が無いのであります。然らば猶一歩を進めて我に在る智の靈を轉じて、情の靈となし、情の靈を意の靈に轉ずることは能ないかと云ふ疑問が起りませう。予思ふに是は無論或る程度までは、我等の短所を引き延して聖靈と協働することに由りて能ると思ひます。然し完全に能るか否は疑問であります。聖靈の能否の問題でなく、人間の天性全く轉じ得るや否の問題であります。聖靈は人の長所と協働して短所と働かない。人が己の短所を用ひて聖靈の刺劇を受けようとしないからです。聖靈は長所と協働します。故に我が短所が伸びさへす

れば、聖靈の働を其だけ助け長つることが能るのであります。然らば我が短所を助け長て丶、之を我が長所と齊しからしむることは能ないかと云ふと、能る望は確にあります。内なる聖靈の誘掖、扶翼があるからであります。故に我等は各志を立て丶、其の短所を推し伸べることに努力勉勵せなければなりませぬ。聖書の勸告も「汝等完全に進むべし」と云ふのであります。支那の預言者も精神一到せば何事か成らざらんと申して居ります。我等活ける神を信じ、活ける靈を有するものが、彼等に慙つべき當はないのであります。是にて略聖靈の智情意の働の説話を致したと思ひます。

問　然らば聖靈を受けた人には復や聖書の必要はない樣に思はれますが。然樣ですか。

答　一應道理に相違はない、然し更に深い道理に訴へると、又聖書の必要が出て參るのであります。該に人は反覆すと申します、獨り人が反覆すのみでない、神も亦反覆すのであります。傳道之書に書すところを見たまへ。

世は去り世は來る、地は永久に長存なり。日は出て日は入り、復た其の出し處に喘きゆくなり。風は南に行き、又轉りて北に向ひ、旋轉に旋りて行き、風復其の旋る處にかへる。川は皆海に流れ入る、海は盈ることなし、川は其の出で來る所に復還りゆくなり。萬の物は勞瘁す、人之を言盡すこと能はず、目は見るに飽ことなく、耳は聞に充ることなし、曩に有し者は又後に在るべし、曩に成し事は又後に成るべし、日の下には新しき者あらざるなり。見よ是は新し者なりと指て言ふべき物あるや。是は我等の先に在りし世々に、既に久しく有りたる物なり。(傳道之書一〇四—十)

聖書は即ち活ける神丶活ける靈の反覆したまひし記錄であります。此の中に聖靈の全き事業が在るのであります。聖書を研窮するは聖靈の事業を研

嘲するのであります。聖靈の默示は我等が平昔研究して居る、此の聖書の語に由りてするのであります。故に又「我が名に由りて父の遣はさんとする訓慰師、即ち聖靈は衆理を敎て、亦凡我汝等に言しことを汝等に憶起さしむべし」と記されてあるのであります。我等が動もすれば聖書に無い所の斬新な默示を受けたと思ふことも、實は久しく旣に聖書に有るもので、唯自分が之を失念して居た、若くは未だ讀み到らなかつた物であるのであります。故に聖書を多く讀まない人には、默示は多く斬新であります。聖書に熟して活る人には、斬新なものは一もない、唯聖書に於て舊い事が今日吾が身に活きて來る故に、吾が上に斬新を感ずるのであります。若其心敬虔にして唯聖靈に由りてのみ導かれんと願求するものに在つては、聖書は悉く默示であります。預言者とは他にない、然して默示を感じて起る者であります。神の反覆したまふ事を知つて、國民を警醒し、信者を反省せしむるのであります。神は實に此の如き人に依り賴ひのであります。否神が聖靈の賜を或る人々に賦與したまふのは、斯の如き僕即ち預言者を起さんが爲であります。神は此の人に聖書を委托するのであります。聖書の委托、嗚呼是れが聖靈を受けた人の第一に感覺する責任であります。聖書を有つものは聖書を尊重する當であります。聖書を有たない者が聖書を賤しむのであります。自分の有で無いからであります。誰か己の寶器を所持して、其の寶器を人に謗る者がありませう。反つて尊んで人に示すのであります、之を賤しみ之を輕んずるのは、其の寶が自分のでなく、人の寶であるからであります。或人は聖書が不完全であると申します。其は其樣かも知れません、然し我等は聖書が不完全だと斷言するほど、聖書に熟達して居ますか何樣でありますか。輕卒に聖書の不完全を唱ふるよりは、自分の聖書の智識の不完全を告白する方が正直ではありますまいか。若し懇なく

聖書を不完全と云ひ得る人は、其人は神の如き人でありませう。又或人は聖書以外に聖書があると申します、其は道理であります、「聖靈汝等に臨むに因て、我が證人となるべし」とある如く、聖靈を受けた者は基督の證人であります。基督は唯其の靈を受けた者に己を委托するので、然らざる者に委托しない、「蓋は凡の人を知り、又人の心の中を知るが故に、人に就て證を立る者を求めさればなり」とあります。此の如き人は何時でも翻つて惡魔の證人となるものであります。故に惡魔も此の如き人に目星を着けないで、基督の證人と定められました聖靈の人に目星を打つて、之を誘惑の目的とするのであります。然樣です。彼は此の猛烈なる誘惑に對して我が身を守り、日日に新に基督の聖潔を顯はさねばなりません。是故に彼の警誡は非常でなくてはならぬ。「惑に入らぬやう目を醒し且つ祈れ」、此が彼の眷々たる服膺でなければならぬ。然樣です靈の人は醒覺の人であります、戰戰兢兢として薄氷を履むが如く、深淵を涉るが如しと云ふことも、君子惕若として懼ると言つてあることも、此の醒覺者の醒覺の狀態を善く發言したものであります。彼は端なく鳥の啼く音にも、差し當つた神の勅命を聽き、意はぬ木葉の戰にも、上よりの諷告を受くるのであります。彼には聖書の文字が盡く默示である如く。萬有の發動が、悉く默示であります。萬有は不文の默示にして、聖書は成文の默示であります。不文の默示が尊むべくは、成文の默示は更に尊きものであります。故に我等は時時刻刻聖書の言如何を顧み。之を以て自ら鑑み自ら律せねばなりません。特に信仰の弱き新參者の爲に此の如き模範を示すの必要があります。彼等は皆聖書の外に聖書なく、聖書を惟一の默示と考へて居が故であります。聖書の外に聖書ありなど云ふのは既に基督の心から離れて居る證據であります。何となれは基督すらも自ら肆にしたまはず、聖書に憑はせんが爲に、切切と聖

書に循ひて行ひたまふたのであります。是は聖書を信ずる猶太人が、己に礙くことないやうにした、基督の慈愛の用意の深く存する所であります。基督の證人として基督の心を心として居るべき者は、聖書の價値に關するやうな言を、苟も口にすべきではないのであります。是が聖書に對する忠義と云ふ者であります。

問　靈の人は既や努力、奮闘を要せず、自然に靈の啓導に進がへるものでせうか。

答　否、人は靈を受けて始めて其の努力、奮闘が効果を有つのであります。此の努力精進に由つて始て漸次に罪惡を離るゝのであります。此の努力精進に由つて、基督の如く事毎に誘惑を受けて之に打ち克つを得るに至るのであります。是の故に聖靈を受けて茲に修養修行が始まるので、是より漸次向上して遂には自己の小智小能を斥てゝ、一向專念に聖靈に信頼して、遂には基督と同化し、神と同化するに至るのであります。パウロは備に此の修行を嘗めた使徒でありまして。彼は自己の最も弱き時に最も聖靈に由つて強きことを證して居ります。彼は此經驗に一歩を進めて、「既や我生るに非ず、キリスト我に在つて生るなり」(加二〇二十)とまで申しました。此時の彼は既や彼自身でない、基督の靈が全く彼に代つた場合であります。彼は即ち道德上の基督であります。靈の人の修養の絶頂に達したのであります。聖靈は我等凡夫罪人をして、此の道德山の絶頂まで登り到らしむるのであります。我等は此の絶頂に於て正に基督と會ふのであります。故にペテロは「神其の榮と德に因て至大なる貴き約束を我等に予へたまへり。此は汝等をして此の約束に由りて世に在る所の慾の敗壞を免れ、神の性質を有たしめん爲なり」(彼一〇五)と申しました。我等が彼の絶頂に達したとき、此約束が我等に成就して居り、我等は各神の性質を有つて居るのであ

るのであります。

問　若し人聖靈に聽かない場合には何樣なりますか。

答　人は聖靈を受けましても、之に聽くと聽かないとは、其人の自由に在るのであります。故に聖書は恒に靈に聽き從ふべきことを敎へて居ります。曰く「靈を熄すこと勿れ」曰く「神の聖靈をして憂へしむる勿れ」など勸めてあります。「靈を熄す」とは其の直覺の啓示を打ち消して、第二の聲に聽き從ふことであります。靈を憂へしむとは其の啓示を打ち消した結果であります。靈は是に於て平かなることを得ません、必ずや胸中に在つて憂悶するのであります。其の憂悶するは猶ほ我等に啓告する所以であります。其にも管はらず猶ほ惡念を維持し、惡魔の誘惑に投ずるのは、聖靈を慢るのであります。「聖靈を慢る者は聖靈を賜ひし神を慢る」(撒前三〇八)のであります。斯かる場合に烈しい神の怒を受けるのであります。昔モウセはメデヤの曠野から埃及に在るイスラエルの族を拔出す爲に遣はれました其の途中、神は彼の子に割禮を授くべきことを命じました。モウセが其妻ヲツホラの反對に遭つて躊躇して行はず、逆旅に就きました時に、「エホバ彼の宿所にて彼に遇て殺さんとしたまふ」と記してあります。是は彼に在る聖靈が、內より興つて彼に逼つて悶絕せしめんとしたのであると思ひます。若し人此度を過ぎて後、猶ほ聖靈に反いて惡を遂げようとすると、聖靈は彼を見棄てゝ己を隱し、之を惡魔に與すのであります。而ると此度は惡魔の靈が彼に來つて彼を操るのであります。錄して「我等主イエス、キリストの能に由りて此の如き者をサタンに交し、其肉體を滅し、其靈をして主イエスの日に救を得しめんと定むるなり」(哥前五〇五)とあるのであります。昔キシの子サウルと云ふのは聖靈を受け、新なる人となつてイスラエルの最初の王位に即きました者でありますが、ペリシテ人と戰ひて歸り、「サ

ウルは千を打ち殺し、ダビデは萬を打ち殺す」と、京童の謠ふを聞て、忽ち嫉妬心を起し、如何にもして彼のペリシテの巨人ゴリアテを殺して勝利をイスラエルに與へた少年ダビデを害せんものと云ふ惡念を起しました。彼は之が爲に惡魔に與され、惡魔の靈に憑かれて、痛く體を惱まされ、而して又烈しく其の嫉妬の心炎を燃されたのであります。此の恐ろしき境遇に在つては、復た悔改むることを知らない。彼は惡魔の靈が何時聖靈に代つたかと云ふことを知らないので、惡魔の耳語が聖靈の其だと云ふ考を懷いて疑はない。恐れない。危ふまない。是非とも之を遂げようとする。見たまへサウロの生涯ダビデを殺さうとして、如何ほど心魂を碎きましたか。彼は時にはダビデに詰られて、痛く哭ひて悔ひた事もあります。然し其が過失であつたかの如く、彼は忽ち其の心を翻すのでありました。事茲に至つては唯神の審判を待つのみであります。神は此の如き者を審くのであります。敵人の前、稠人公衆の前に、神を慢り、神の聖名を瀆した、罪人を審き神の刑罰を衆人に示し、罪人をして恐れ惶いて靈魂の救を全うせしむるのであります。錄して「今審判せらるゝは主の我等を懲しめたまへるなり、是我等をして世の人と同に罪に定められることなかしめんが爲なり」（哥前十一〇三二）とあるが如くであります。サウルは神の審く所となりました。彼は其のペリシテ人に對する最後の戰爭に於て敗衂し、ペリシテ人の射手に射られて致死の重傷を受けたのであります。尙且彼の爲に謝すべきことは、神は彼を射殺したまはぬ。重傷を負はせました。恐れ惶いて靈魂の救を全うする餘裕を與へたのであります。若し神の審判に由りて肉體が打たれなければ、精神が打たれるのであります。呪はれたる者となるのであります。別言すれば此世界で我心から地獄の憂目を見るのであります。今迄樂しく禍であり來つた此の世界が、忽ち恐しい地獄の相貌と變つ

て、我は一人其の地獄の中に墮ちて居る。胸の中に齒車が轉つて異樣な苦痛を感ずると、何とも言へない恐怖の念、絶望の念、不安の念が注して來る即ち前に話した如くであります、其の時には既う立つて居ることも成ねば、座つて居ることも能ぬ。唯地の底から引着けらるゝ心地がして、寢て居る限である。生て居ることも成ねば、死で了ふことも能ぬ。唯恐しく、唯畏いのである。太陽が畏い、燈火が畏い、月が畏い、星が畏い。市街に出れば人が畏い野外に出れば樹木が畏い、一切の光一切の創造物から彈ね着けられるのであります。然らば暗黑は何樣であるか。此が此世からの地獄だと思へば、絶對の恐怖を感ずる。陰欝なる曇天が既う耐らぬ。三日月の暗澹たる晩、實に恐ろしく物凄い。闇夜になる。實に畏い絶頂である。燈なしには一刻も寢て居れない。夜興きて竊と外の闇黑を見る。何とも云へぬ心地がする。慄とするや、身の毛の立つと云ふ勇氣は疾に失せて居る。泣く勇氣も無い。叫ぶ勇氣もない。唯我と云ふ者が悄然と怯へて居る。我は生ながら地獄に墮ちて居ると思つて居る。既う儼に死の宣告を受けた囚人、地獄行の札が附いて居る。唯人に見えぬので、我には分り切つて居る。既う實に在るにも在られぬ絶望境です。此時此際願ふ所は消滅であります。所が其が能ないのみでなく、短いと思つて居た一日が、非常に長くなるのである。一日か一年にも十年にも成る、死が何時來るかが知れない。生存の悠久なのに惶懼震駭するのであります。其の長き生涯を經て、其から眞の地獄に往つて永刼絶望の恐怖を受くる。此が果して嘗て神の聖靈を受け、其の思寵に浴沐して居た我自身かと思ふと、淺ましくて、情なくて、苦しくて、恐ろしくて、天地に哭き號びたいと思ふほどでありながら、哭く勇氣か出無い、涙が出ない、獻欲らうとしても鼻息で濟んで了ふ、唯出る者は嘆息ばかり。聖靈に慰へても、聖靈は今安に在るか全く知れない。神に祈

つて悔改めても、唯神の逆鱗を重ぬるのみで、其の悔改が祈る忽ち彈ね返される。然ればとて惡魔を呼んで、其の聲援を得て、大に反逆的活動を爲ようとしても可けない。惡魔は何處からか遠く離れて居て唯乾笑して居る耳であります。全く神の手に落ちたのであります。「活ける神の手に陷るは畏るべき事なり」(希十〇三一)現實實際其であります。「爾の救の喜を我に返し、自由の靈を(再び)與へて我を保ちたまへ」(詩篇五一〇十二)と叫びました。ダビデは賢臣ウリヤを殺して、其妻バテシバを奪ひまして、神の人ナタンの言に審かれました曉、此の經驗を有つた者の樣であります。聖靈を慢つて審判かれましたものは、實際此の心理的地獄に落さるゝのであります。無論職業を執る事も、世間と交際することも出來ないのであります。唯斷食して死ぬと云ふ決心を決めなければならぬのであります。斯くて一個月、二個月、乃至三個月を經て神の可と見たまふ時に至つて、始めて其罪が救されるのであります。救の喜が我に返され、自由の靈が我に歸り來るのであります。是に至つて吾が「今(此の世にて)罰せらるゝは、主の我等を懲しめたまふなり。我等をして世の人と同に(審判の日に)罰を受ること無らしめ爲なり」と前に申した聖書の語が活ける神の惠の音信なることを知り、天に拜し地に額いて唯既う喜び躍ります。此上罪を犯すことは到底も出來ぬ、唯戰戰兢兢として、偏に神の聖旨に適ひ、岌々乎として其の聖潔に與らんと勉むるのであります。道傳の惡質を受けて、煩惱の深厚なる者も、然して始めて「凡神に由て生るゝ者は罪を犯さず、蓋神の種其の衷に存るに由る」(約壹三〇九)と云ふ聖徒の生涯を現實するに至るのであります。

問　聖靈の働に就き、驚くべきことを聞くを得ました。

答　最後に聖靈の交際と云ふ事を說いて聖靈の說話を結びませう。今日敎會の

禮拜や、祈禱會の終に牧師傳道師が會衆の上に祝禱と云ふ事を施します。其の餅は「願は主イエスキリストの恩と、神の愛と、聖靈の交際、汝等衆と偕に在らんことを」(哥後十三〇十四)であります。是は使徒パウロの書簡の末尾の祝福の餅を取りたる者であります。此の聖靈の交際とは何であるか神の靈と人の靈との交際を言ふのであります。即ち聖靈が斷へず前來申した方法を以て、我が靈と交感して、之を助け、之を慰め、之を啓導することであります。然し聖靈の交際を求むるには、我が靈が恒に醒めて聖靈に交際して居らなければなりません。然樣であります。造次にも顚沛にも、食ふにも飲むにも、寐るにも寤むるにも、我が靈を以て聖靈に接觸して、其の啓示を待つのであります。是が聖徒たるものゝ內面的生活であります。天國に在る者は實に斯の如き者であります。

第七章　最後の救拯

問　基督信者は皆悉く聖靈を受けて天國に居る者の如く世界に住むのでムいましたら、此の世界は終に天國となりませうか。

答　否我等の最後の救拯は來世の國であります。此の世界の最後は滅亡であります。世界の滅亡は侵略爭奪の戰鬪から始まつて、神の審判に終るのであります。此の世界は既や基督信者を置くに堪へなくなるのであります。基督の世の終の預言に、

國民與りて國民を攻め、國家は國家を攻め、饑饉、疫病、地震、處處に有るならん。是皆禍(世界の滅亡)の始なり。其時人汝等を患難に交し、汝等を殺すべし。又汝等我名の爲に萬民に憎まれん。(太二四〇七、八九)

とあります。基督信者は如何なる時代にも世界主義、四海兄弟を唱ふるのであります。此の如き教義は凡の國家國民が各帝國主義を標榜して、侵略爭奪を事とする時代には不適當であります。彼等が基信督者を國家に敵する者、敵を愛する者として之を憎み、之を殺すのは當然であります。

問　國家國民の競爭は何の時代にも之ある樣に思ひます。之を以て世界の終と致したらば、世界は初から終を告げて居るのではありますまいか。

答　否、否、歐羅巴の歷史では基督教會が羅馬帝國に代つて世界を統治した時代があります。此時には世界は基督の王國であつて、基督が諸王の王であつたのであります。此時には諸王諸國諸民の名はあつても、今日の謂はふる國家國民といへるが如き、教會から獨立した者でなく、特名分立の意義を有したのでは無く、一家庭に於ける家族の如きものでありました。故に其運動は共同運動、即ち世界的運動を共にしたるものであります。彼の十字軍の如き固より過失ではありますが、やはり其の共同運動の一大現象であります。諸國諸民が教會を離れて獨立し、特名分立の意義を有して互に侵略爭奪を事とするに至つたのは、十四世紀に當つて、人文復興（レヂイサンス）と稱せられた、思想上の大革命の結果であります。歷史家が近世史と稱するものは、即ち此の國家國民の特名分立の時期、侵略爭奪の時代でありまして、即ち世界の末期として、基督の預言に應當して居るのであります。

問　然樣でせうか。

答　是のみでないまだまだ不思議な事があります。新約全書の末篇に約翰默示錄と云ふ一書があります。即ち或る秘密なる形象を以て、基督以後當に起るべき歷史的事實を預告したる未來記であります。此は昔から甚だ難解の書と知られて居ります。然し聖靈の啓示に由りて、一種の解釋法を用ふれば、諸方面に於ける史實は之を掌に指す如くであります。此の未來記の中に次

の如き豫言があります。

我又龍の口と獸の口及び僞の預言者の口より蛙に似たる三の汚たる靈の出るを見たり。此は惡魔の靈なり。異なる跡を行ひて全地の諸王に就り、彼等をして全能の神の大なる日の戰に集らしむ。(默十六〇十三、十四)

是の龍と獸は、同に惡魔の比喩であります。此の惡魔の口から、蛙の如き汚れたる靈が出たと云ふのは、正しく上説の人文復興を喚び起しました、近世的精神に當るのであります。此の人文復興の端緒は、紀元十三世紀に當り、伊太利に於て神なく、靈なく、基督なき、希臘羅馬の古代文學の復活に起原して居ります。是等古代文學は一たび基督敎の勃興の際、之が爲に葬り了されて居たものであつたのであります。然るに一たび此の舊學問の復活が其の端緒を啓きますと、近世的精神は猛然として新しい噴火山が破裂したかの如く、怪焰天を衝くが如き勢力を以て復活して參りました。此等新學問、實は即ち舊學問の主唱者は、自ら人道家(ヒューマニスト)の名を冒し、古き希臘人羅馬人の異端外道を挾んで、以て基督敎の天啓を罵到し初めたのであります。彼等の謂はふる人道とは、神なく、靈なく、基督なく、天啓なく、人の腹から生み出した人の思想即ち沒式(パプヂスマ)のヨハネ「地より出たる者は地の事を語る」と云つた其の物、使徒パウロか「己が腹に仕へて神とする」と云つた其の者であります。彼等は蛙の如き汚なき腹から、蛙の如く饒舌多辯をするのであります。然し「人衆ければ天に勝つ」と、誰にも言つた樣彼等は其の饒舌多辯を以て暫く其の人道を以て天道に勝つのであります。其が即ち今日の不信仰時代の現象であります。三の靈と曰へるは、復活したる古學が新なる形を取つて最も有力に新人道を鼓吹し、根本から基督敎を覆へすべく反抗して居る、近世の哲學、科學、文學の三者であります。此の

中に謂はふる人道の精神即ち汚れたる靈が潜伏して居るのであります。一神論に反對する凡神論、靈を拒絶する所の物質論、信仰を破壞する智識論、世界主義を拒絶する國家主義、利他主義を排斥する利己主義、倫理を蕩潰する自然主義、博愛慈悲に反する殺盜的道德、皆此の中より出るのであります。然して惡魔の靈に感動せられて此等の新しい異端外道を創唱する者は僞基督、僞預言者として基督よりも尊崇せられ、基督よりも多く信者を有して居るのであります。又謂はふる「奇なる蹟を行ひて云々」以下は、彼等の種々科學的發明、例せば蒸氣、電氣の發明、諸の光線の發見を爲し、之を實地に應用して未曾有の奇術を顯し、更に之を實用に施して、國民の稱讃と感謝を受け、基督の役者に代りて人民の師となるのであります。而して國民、國家は、師たる此等の學者に聽從し、團体保存、生存競爭の意義に隨ひ、公然と侵略爭奪の戰鬪を事として、最後に神の大審判の戰鬪に會するに至るを言ふのであります。

問　なるほど。

答　猶ほ一層史實の應驗を有つた預言があります。先

我一人の天使底なき坑の鑰と大なる鏈を手に携へて天より降るを見たり。彼惡魔と稱へサタンと稱ふる龍、即ち老蛇を執へ、之を千年の間縛置んとす。之を底なき坑に投入れ、閉こめて其上に封をなし、千年過るまで諸國の民を惑すこと莫らしむ。其後必ず暫時の間釋放さるべし。(默二十〇一一四)

とあるは、基督教會が遂に一たび世界に勝ちて、古代の學問、即ち神なき靈なき、希臘羅馬の古學を一たび葬つて、千年間其の發言を許さないことと、千年畢つて必ずや其の暫時復活を容され、發言を許さるゝことを言ふのであります。羅馬皇帝コンスタンチンが基督教を公許したのは紀元三百十三

年、而して人文復興の魁祖と喚れた伊太利の詩人ダンテは、紀前千二百六十五年に生れて千三百二十一年に死に、其の大作「神曲」が新學問の主唱として世に顯れたのは、彼の死後でありました。此のコンスタンチンからダンテに至る間が、正に千十八年であります。預言の謂はふる千年間とは此の時間を言つたものであります。次に預言書は此千年間の歴史を次の如く預言して居ります。

我多の位を見しに其上に座する者あり、彼等審判の權を予へらる、又イエスの證及神の道の爲に首斬られたる者の靈魂を見たり。皆生てキリストと共に千年の間王と作り、彼等は神とキリストの祭司と作り、キリストと共に千年の間王たるべし。(默二十〇四)

是は歴史上「中世紀」と稱せられて居ります、教會政治の時代に係る未來記であります。羅馬教會が俗權即ち軍隊の權威に由らず、正義と愛の權能を以て、諸國諸王の上に立つべきは當然の事であります。茲に謂はふる基督の王國とは、羅馬教會の形骸を謂ふのでなく、其の内に在る所の基督的精神に就て謂ふのであります。彼のグレゴリー七世が基督の精神を以て世界の平和を主張し、横暴なる日耳曼皇帝ヘンリー四世を破門したのは、教會の首として當然の處分であります。但し後世の法皇が兵力を挾んで俗權と爭つたのは、皆不法の所爲であります。要するに羅馬教會が、醇化された物として、此時代に於て基督王國を顯現したのは、史實であります。預言は最後に此の千年の後に起るべき事實を次の如く記して居ります。

千年終てサタン其囚より釋放さるべし。彼出て地の四方の列邦ゴグとマゴグを惑し、之を集て戰はしめんとす。彼等の數は海の沙の如し。彼等地に遍く滿て聖徒の陣營と愛せらる城とを圍む。此時は火天より降りて彼等を焚盡せり。(默二十〇七―九)

謂はゆる「サタン其囚より釋放さる」と、是れ即ち學問の復活、人道の復興、別言すれば惡精神の復興を指すのであります。此の中に惡魔が開放せられて居て、此中に其の反動を働くのであります。此中から惡魔は凡神論、物質論、自然科學、自然主義、超人主義を嘘吹するのであります。此中からダンテ、ペトラーク、ブルノー、スピノサ、ベーコン、ボルテール、コント、バイロン、ゲーテ、ダーヰン、ニイチエ、ゾラ、イブセンの徒が相繼いで出たのであります。彼等の説には眞理があります。然し彼等は其の眞理以上に主張して居ります。其の僅に知る所を以て知らざる所を掩ひ、其見る所の物を以て其見ざる所の物を否定し、物質の智識を以て、靈の實在を拒絶して居るのであります。尚且世界は基督を去つて彼等に聚り、彼等に從ひ聽くのであります。惡魔は實に彼等に託りて四方の列國と其民とを聚めて基督を離れ神と爭はしむのであります。人と神との戰でなく、惡魔との戰であります。ゴグとマゴクとは神に逆いて戰ひました、古代の强國と其王の名でありまして、未來の反逆的國民の代表者として用ひられた語であります。即ち預言者以西結の書に、

エホバの言我に臨みて曰ふ、人の子よロシ、メセク及びトバルの君たるマゴグの地の王ゴグに、汝の面を向けて之に向ひて預言して言ふべし、主エホバは斯く言ひたまふ、ロシ、メセク、トバルの君ゴグよ、視よ、我汝を罰せん。我汝を引もどし、汝の腮に鉤を施し、汝及び汝の諸の軍勢と、馬と、其の騎者を曳いだすべし。是皆其服裝(いでたち)に美を極め、大楯小楯を有ち、凡て劍を執る者にして大軍なり。

とあります。此の如きゴグ的國王マゴク的國民が續々將來に起り來りて侵畧爭奪の戰鬪に從事し、世界主義を唱へ、博愛慈悲を敎ふる基督信者を捕へて、敵を愛する者、敵に通ずる者、國賊として反逆者として、之を迫害

するのであります。最後に神は此等無力の信者の爲に、彼等に向ひて審判の決戰を決行すと、其樣云ふのであります。此の預言書の書かれましたのは、紀元一世紀即ち基督の同時代であります。然も同じ使徒の手に成りました約翰福音書よりも、より早く世に識られて、初代教會の信者に讀まれたものであります。此の早き時代に於て、千年後、二千年後に起るべき顯著な史實を、斯樣に鮮明に指示して居ると云ふのは。甚だ不思議ではありますまいか。此書は之を世俗の世界史と對照して見ますならば、實に基督降生以後に於ける、基督教傳播の預言書、回回教の勃興、人民の大移轉、教會の全能、羅馬教の墮落、宗教の改革、人文の復興、科學の萬能に關する預言書、東亞即ち亞拉比亞、土耳其、蒙古が西歐に對する侵略の預言書、而して又日露戰爭の預言書であります。予は此の書の記述に基づいて日露戰爭の事實を、其の一年前に預言した者であります。予は更に米國の未來、文明の最後も此の中に默示せられて居ると見て居ります。而て又多數の基督信者の中には、前に申した千年の基督王國を、猶將來に來る者と待つて居ります。然し前に申した如く、其の謂はゆる千福年は既に地球上に來て而も過去つたのであります。今日の「基督王國（キリストレヒドム）」なる名稱は取も直さず其の遺物として殘つて居るのに過ぎません。再來我等が基督の再來に就て待望する事物は、彼の審判の戰であります。審判の戰の爲に再び來る基督に就ては、此の如く記されて居ります。

又日、月、星に異象あるべし、地にては諸國の人哀み、海と波との溺（なりとり）
渚（うく）によりて顚沛（くるたへ）、人々危懼つゝ世界に來らんとする事を俟惱むべし。
是天の勢震はるべければなり。其の時人々は人の子の、權威と大なる
榮光を以て雲に乘りて來るを見るべし。此等の事の成初ん時には、起
つて汝等の首を擡げよ、蓋は汝等の贖近ければなり。（路二一〇二五—

二八）

我等の將來に對すべきものは此の趣意に於ての基督の再臨であります。又基督の再臨に於ける彼と我等との遭遇に就ては、此の如く記されて居ります。

夫主號令と、使の長の聲と、神の鉦を以て自ら天より降らん其時キリストに在りて死し者先に甦へり、後に活て存れる我等彼等と偕に雲に携へられ空中に於て主に遭ふべし、斯て我等何日までも主と偕に居ん。（撒前四〇十六、十七）

是、及び、是より以上が今日我等の理想する所の天國であります。此の世界は不信者と共に此の儘に死滅し畢り、我等信者は彼の天の國にて喜び歌ふのであります。而して既に「此等の事の成り初むる」を見たる我等は、日日起つて首を擡げ、最後の救拯を待望しつゝあるのであります。

基督教大系　大完

不許復製

明治四十一年三月二十一日印刷
明治四十一年三月二十三日發行

著者　宮崎八百吉

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者　福永文之助

横濱市太田町五丁目八十七番地
印刷者　村岡平吉

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行所　警醒社書店
（電話新橋一五八七　振替貯金五五三）

横濱市山下町八十一番地
印刷所　福音印刷合資會社

明治四十一年三月二十一日印刷
明治四十一年三月二十三日發行

定價 金六十錢

著者 宮崎八百吉

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者 福永文之助

横濱市太田町五丁目八十七番地
印刷者 村岡平吉

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行所 警醒社書店
（電話新橋一五八七 振替貯金五五三）

横濱市山下町八十一番地
印刷所 福音印刷合資會社

不許復製

宮崎八百吉譯

新約聖書（私譯）羅馬書

定價 金十二錢
郵稅 二錢

此書の原書は獨逸の聖書協會の出版に係る最も新にして又最も古き希臘文原書なり目下の難讀難解を以て有名なる羅馬書の如き殊に其必要に逼れり是れ此の私譯の出る所以なり譯者外十年一旦此の原希臘語の修養を積み聖書改譯は基督教界の此書に着け盡く從來の晦澁不明を一掃し前人未發の啓を抉剔し出し斬新にして彼の希望に警拔なるパウロの

啓導を感じ聖書研究に從ふこと聖書を得茲に聖書改譯の端を發き先づ筆を異にせる主なる聖句の微妙を摘發し添ふる**新舊譯筆**を對照は隱微なる羅馬書の**宗教意識**を論述せる羅馬書管見の一篇を以てせり

宮崎八百吉譯

アウガスチン 懺悔錄

定價 七十錢
郵稅 八錢

肉慾の甘樂罪惡の苦悶、人生の哀別離苦、花林孤影の大泣哭而して後清亮なるあり良心ある代表的偉人の聖徒的獨身生活嗚呼是れ血あり肉なるを懺錄悔也、明確不磨の見神在り玲瓏徹底の默會在り、信者不信者之を讀んで其自個寫眞鏡知れ、

エヴアンゼリスト木村清松著

世界一週 傳道旅行

定價 金五十錢
郵稅 金六錢

著者過般世界傳道旅行を思ひ立ち歐米の大都府に於て白人に悔改を勸め轉じて埃及より亞地に入り各所の聖跡を訪ひ且つ救主の降誕地を始めとし神の撰民と稱せし土人の後裔に神の大道を傳へキリストの救と惠を說き歸路東洋沿岸の各港を經凱歌を奏しつゝ歸朝せられたるが其旅行の大要を記述したるは此書にして近時發行せられつゝある旅行記とは自ら其撰を異にせる良著なり信徒は宜しく信仰復興の爲に未信徒は眞の道に入る唯一の栞として必ず座右に供へらるべし

德富健次郎著

順禮紀行

寫眞版地圖數十枚入菊判半截四百八十頁クロース製美本定價金八十錢小包金十錢

此は著者の順禮土產也、著者思立つ由ありて飄然順禮の途に上り、パレスタインの聖地に基督の昔を偲び露西亞に巨人トルストイ翁を訪ふて歸りぬ。百二十日、舟車六千餘里の行程、境に觸れて興を起し、人に接して感を生ず。歸來筆をとりてこゝに本書を成しぬ、卷中多く著者の携へ歸へる寫眞版を挿む、本文と相待つて一讀、著者と共に西亞東歐を旅するの興あらんか。

再版 基督教思林

朝の卷

一名日毎の學び　四百二十頁　定價　金七十五錢

本書は泰西思想家の深遠なる言説を以て、斯道の眞理を闡明せるものにて、日毎に聖書の題詞一二節を説明するに、名家の良思聖想を以てしたる者なり。卷尾に附録したる三種の索引は、書中の思想を應用せんと欲する者をして甕中物を探す如くならしむ。思想家百七十餘人一覽表は之が應用に當り特に思想の價値をます者と云ふべし。説教家、演説者、日曜學校教師諸君には、坐右缺くべからざる良友なり。

再版 基督教談叢

夕の卷

一名日毎の教へ　四百頁　定價　金七十五錢

本書は宗教的佳話美談を以て、斯道の眞理を説明せんと試みたるもの、一年三百六十五日、日毎に聖書本文を掲げ、之を説明するに一二適切の事實談を以てする者にて、その體裁「思林」と相同じとす。書中掲載せる談話、無慮四百餘項は説教者、演説者、日曜學校教師諸君のため、材料の一小倉庫たるべし。卷尾に附録したる二種の索引の便利なるは勿論とす。

星野光多君修養三書

新版 基督教通觀

聖日の卷

四六判五百三十頁　定價　金壹　圓

○第一、序編　○第一、宗教の必要○第二、宗教の資格○第三、宗教の活用○第四、宗教の眞價○第五、光暗の撞突。

○第二、概論篇　○第六、基督教の三大要素○第七、神の準備と人の準備○第八、基督教の使命○第九、人生の目的と基督教○第十、基督教と生活○第十一、基督教と現在境遇○第十二、基督教と人格、

○三、教理篇　○第十三、神（其一）○第十四神（其二）○第十五、人○第十六、基督教（其一）○第十七、基督（其二）○第十八、基督（其三）○第十九、救罪の權能○第廿、贖罪論○第廿一、聖靈（其一）○第廿二、聖靈（其二）

○第四、基督編　○第廿三、基督問題○第廿四、基督の出生○第廿五、基督の年齢○第廿六、基督の要求○第廿七、基督の死狀○第廿八、基督の復活○第廿九、復活の能力○第卅、寶石として基督○第卅一、要石として基督○第卅二、基督の榮。

○第五、生活編　○第卅三、新生涯の始終○第卅四、生活の目的○其卅五、吾人の共働者○第卅六、生活の二種類○第卅七、聖徒の自由○第卅八、聖徒の喜樂○第卅九、聖徒の滿足○第四十、聖徒の二特質○第四十一、日毎の十字架○第四十二、始終一貫の精神。

○第六、教會編　○第四十三、教會の成立○第四十四、教會の特質○第四十五、教會の模形○第四十六、教會の生涯三段階○第四十七、教會の繁榮と其原因。

○第七、傳道編　○第四十八、傳道の精神○第四十九、傳道の實力○第五十、傳道の材料○第五十一、傳道の成功○第五十二、傳道の責任及び利益。

エール大學教授スチーヴンス博士著
關西學院教授松本益吉譯

耶蘇の教

定價五十錢
郵稅六錢

大阪朝日曰く　本書は基督教研究者の爲に最も明瞭にして正確なる觀念を與ふる好著ならん

開拓者曰く　著者の教授を受けたる松本氏耶蘇の教を譯して世に公にせらる、原著餘り專門的ならず譯文も亦明瞭なれば耶蘇の教の原形如何を研究せられんとするもの一讀を要す

東京毎日曰く　耶蘇研究者の爲には無上の好指針なるべし

山田先生

說教集

定價四十五錢
郵稅四錢

新人曰く　說教の數は總てゝ十六、美はしいトピックも少くはない……かくの如き良說教集は一人の私有すべきものではない。其公刊せられたのは善い思付と云べきである……我が說教文學界に一の財寶を加へたるを喜ぶ

毎日曰く　山田氏は教界一方のオーソリティーである說教集と云ふ者は未だ我國にこそ左程無いが歐米各國の碩學高德で說教集を有せざる者は無い本書の發兌は教界に裨益する所大なるものあるに相違ない

萬朝曰く　各編皆熱心の籠れるものあるを多とすべし

新公論曰く　春の教。自然の教。神として世の惱みて弱き者を奮起せしむべき一切の福音は漏さず此書に於いて美術的に面白く說かれてある吾人に此の種有益の書の續々基督教に依つて出版されるを喜ぶものである

海老名彈正序
渡瀨常吉著

國體と基督教

定價廿五錢
郵稅四錢

◎加藤博士の所論を駁す◎

本書は最近我國の思想界に一波瀾を起せる加藤老博士の吾國體と基督教を駁論したるもの凡そ科學及國體の關係且つ彼我論爭の如何を知らんとするものは是非一讀せざるべからざる近來の良書なり

基督教叢書

（甲）教論集　編輯主任者　星野光多
（乙）傳記集
（丙）外著紹介集　著述分擔者　基督教各派名流

右は信者にして基督教的智識を得んことを望む者、求道者にして斯教の研究に熱心する者のため、特に出版する者にて、續々世に公にせらるべし。左記の諸氏は既に起稿を承諾せられたるが其分擔せられたる題目孰れも基督教の要點たり、且つ各自その造詣深き所に隨つて著述せらるゝ事なれば讀者を利益すべき毫も疑を容れず。毎冊共四六判百ページ内外の小冊にして文體は平易通俗を期せり。出版の上は大方の御購讀を請ふ。

○基督教辨証論（既刊）　有馬純清
○自然と天啓　高杉榮次郎
○人性と宗教　田島進
○神の存在　日野真澄
○聖書の價値　高橋三郎
○初代の基督教　笹尾太郎
○福音入門　鵜飼朱雀
○福音書著者　山崎庚午郎
○基督の時代　松鹿旗之進
○神の國　渡部永雄
○基督教の根本眞理（既刊）　露井文治
○基督傳　無柏川添萬壽助
○基督論　深井得
○基督教訓　滋德園
○基督の比喩（既刊）　植村正久
○信仰の基督　八梶三郎

○贖罪論　平岩愃保
○基督の救　綱島佳吉
○復活論　小崎弘道
○基督教倫理　毛利官治
○基督教と現在生活　山田寅之助
○靈魂不滅論（既刊）　柏木義圓
○祈禱論　星野光多
○現在と未來（既刊）　武本喜代藏
○基督教と家庭　皆田篤實
○基督教の三大流　三浦泰一郎
○基督教と宗教　星野德治
○舊的文學一班（既刊）　三戸吉太郎
○佛教と基督教　今泉眞幸
○耶蘇の三大觀（既刊）　今井範雅

325
43

325
43

020462-000-9

325-43

基督教大系

宮崎　八百吉／著

M41

ABI-0272